

東アジア言語（日本語・中国語・朝鮮語）の南北方言における ある種の音韻対応 [k・x - p] < [*k^w]

安 部 清 哉

論文要旨

本稿では、東アジア言語に見られるある種の音韻対応の傾向「k・x - p」について取り上げる。前半部分では、1 国内ではじめて紹介する主題もあるので、その前提となる言語・文化的特徴に関する安部の既研究内容についての解説を行っておく。

アジア・環太平洋の連続する広い領域には、「モンスーン・アジア（気候）」（Monsoon Asia）と呼ばれている気候特徴をその背景にもつ文化的共有現象が認められる。この領域には、神話、動物、植物、民俗、考古学などの文化人類学的な多くの共通性のほか、言語においても共通する現象や、同語源の蓋然性の高い単語の分布が認められる。それゆえ、この領域を「Monsoon Asia Cultural Sphere、MA 文化圏」と安部（2003）で名付けた。そのユーラシア大陸側の文化境界線を、動植物の分布境界線の命名に倣い、「Monsoon Asia-ABE-Line」名付けた。

また、この MA 領域の東アジア地域では、気候の寒冷・温暖の格差が南北の文化を 2 分している文化境界がある。その南北境界線は、日本列島の南北方言分布境界線（気候線）と、朝鮮半島の南北方言分布境界線、及び、中国の「秦嶺－淮河線 Qing-Ling = Huai-river = Line」を結ぶ、一続きの文化境界線を形成している（「Monsoon Asia Central Climate Line M. A. 中央気候線」と名付ける）。

【表 1】MA 文化圏内の言語の「火」を表す語 [*poi ~ *apoi]

日本語 Japanese	[hi < pi, po < *ʔpo < *ʔpoi < *apoi]
中国語 Chinese	[huo (xuə・xua) < hua < *xwər 上古音 (<*k ^w uər) < *puər < *puəi < *ʔpuoi < *apoi]
アイヌ語 Ainu	[apé < *apui < *apoi]
朝鮮語 Korean	[pul < pīl < *pui < ?]
南島語 Austronesian	[*apuy < *apui < *apoi]
アルタイ語祖語 Proto Altaic	[*p ^ʰ ore] (fire, burn)/Greenberg (2002), Eurasianic, [*par]

【Chart 1】 On Sound Correspondence ‘b/p—m, d/t—n, *g/*k, x, h—p・b (< *k^w),’ between North and South Dialects in East Asian Languages; Japanese, Chinese and Korean.

East Asian Lang.	Bilabial	Alveolar	Labial, Velar (Labial Velar) [k or p < *k ^w Double articulation]	distinctive feature
North Dialect	b / p	d / t	*g/*k, x, ʒ, h, *#h 【※ note】	plosive
South Dialect	m	n	p, ɸ, f, *k ^w , *g ^w , *#h ^w , ku, gu, 【※ note: #h = voiced [h]】	labial, nasal?

（表の注は本文の表参照）

注目されるのは、このMA文化圏の東アジア言語である日本語・中国語・朝鮮語において、それぞれの南北方言に、共通した音韻対応 (sound correspondence) の傾向を指摘することができることである。それは、 $b \cdot p - m$ 、 $d \cdot t - n$ 、 $*g \cdot k \cdot x - *g^w \cdot *k^w \cdot p$ (北—南) と示することができる【表1】。この「音韻対応」の傾向は、概略北方が破裂音 (plosive) 的傾向、南方が nasal (or Labial, grave 暗音) 的傾向での対立と把握することができる。

この南北での「音韻対応」の指摘は日本語・中国語・朝鮮語ばかりでなく、東アジア言語の研究にとって重要であると考えられる。なぜなら、この指摘によって、例えば以下のように、これまで別語源とされてきた基礎語彙「火」の語源が、皆同一語源 (*pu) である可能性も出てくるからである。

今後は、言語のこのような関連性から見ても、このMA文化圏というアジア・環太平洋領域を視野に置いていく必要がある。(本稿に関連する安部(2025. 3b、2025. 3c)も参照)

キーワード【音韻対応、モンスーン・アジア文化圏、南北対応、河川名、秦嶺・淮河線】

0、はじめに

執筆者は、これまで、アジア・環太平洋の連続する広い領域に、Monsoon Asia という気候を背景にした言語的、また、文化的共通現象が認められることを指摘し (安部 2001. 8 以降、参考文献参照)、「Monsoon Asia Cultural Sphere、MA文化圏」と名付けて、調査を続けてきた (【図1参照】)。

その東アジア地域では、気候の寒冷・温暖の格差が、南北の言語 (の方言) と文化とを2分している。その「南北 (言語文化) 境界線」は、日本列島の南北方言分布境界線 (気候境界線) と、朝鮮半島の南北方言分布境界線であり、さらに、中国において既に知られている文化境界線である「秦嶺—淮河線、Qinling—Huaihe—Line」がそれに該当する。そして、これらは、アジアの中央を東西に横に貫く、一続きの文化境界線を形成しているので、「Monsoon Asia Central Climate Line (M. A. 中央気候線)」と名付けた (【図1、図2参照】、中国—朝鮮半島—日本列島を横切って連続する境界線を参照)。

注目されるのは、このMA文化圏の東アジア言語である日本語・中国語・朝鮮語において、それぞれの南北方言に共通した、ある種の「音韻対応 (sound correspondence)」の傾向を指摘することができることである。それは概略、 $b \cdot p - m$ 、 $d \cdot t - n$ 、 $*g \cdot k \cdot x - *g^w \cdot *k^w \cdot p \cdot f \cdot \Phi$ (それぞれ、横線の「左—右」が「北側—南側」の音声特徴) と示することができる (【Chart 1】参照、その提示は、安部 (1990) が最初のものである)。この「音韻対応」の特徴は、概略、北方が破裂音 (plosive) 的傾向、南方が鼻音 (nasal) あるいはまた唇音 (labial) 的傾向での対立と把握することができる。

本稿の目的は、この3種類の音韻対立の傾向のうちの1つ、「 $*g \cdot k \cdot x - *g^w \cdot *k^w \cdot p \cdot f \cdot \Phi$ 」と再構成して解釈した対応に関して、その一事例を簡略に報告するものである。

1、河川名と類別詞の分布領域とモンスーン・アジア

アジアには、共通した言語現象と、同語源の蓋然性が高い基礎語彙の分布が認められる。それは、特に河川名 (Hydronymic System) と類別詞 (classifier) に顕著である (詳しくは、安部 2003. 7, 安部 2004. 12, ABE2006 等参照、河川名のⅠ「ナイ」、Ⅱ「サワ (沢)」、Ⅲ「ヌマ (沼)」の語形分布などは最新の安部(2025. 3b、2025. 3c)参照)。その類別詞の分布領域は、Monsoon Asia 気候 (以下、MA 気候) の領域と共通し、かつ、Frobenius (1938) が指摘する東洋の類型的な神話分布の領域ともほぼ一致している。それは、アジアから環太平洋に及ぶ「アジア・環太平洋」の地域 (【図1】) である。

2、モンスーン・アジア文化圏 “Monsoon Asia Cultural Sphere” という領域

1 に紹介したモンスーン・アジア気候の領域のうち、ユーラシア大陸側は、気候学において比較的明確な境界線が示されている (安部(2025. 3c)掲載)。そこで、安部の日本語方言での研究方法と同様に、このMA 領域に一樣に分布する文化現象、ないし、その領域の外側の世界とは性格を異にする文化現象を、文化人類学的現象全般に互って探索した。すると、例えば一例を示せば以下の①～⑮のように、多くの特徴的現象を見出すことができる (これらの他に新たに見出した諸現象は安部 (2025. 3c) の分布地図参照、以下の 18 点の分布図と出典情報等もこれを参照)。

《モンスーン・アジア文化圏の文化人類学的諸特徴》

문순 아시아 문화권의 문화인류학적 제 현상 (분포도는 아베 홈페이지 참조)

- ① Distribution of Classifiers by Aikhenvald 2000,
[「類別詞」の分布領域] [분류사] 분포지역]
- ② Monsoon Asia Area by Yoshino, Masatoshi 1999,
[気候区域モンスーン・アジア気候区] [기후구역 문순아시아 기후구]
- ③ Region of the precipitation over 100mm (in July) in Asia & Pacific rim
[アジア・環太平洋における夏季 (7 月) の降水量 100 ミリ以上の領域]
[아시아・환태평양에 있어서 하기 (7 月) 의 강수량 100 밀리 이상 지역]
- ④ Distribution of Chopping Tools in Paleolithic era by R. Lewin 2002,
[旧石器時代の Chopping Tools (打製石核石器) の分布領域]
[구석기 시대의 Chopping Tools (타제석핵석기) 의 분포지역]
- ⑤ Distribution of Dioscorea (yam) by Nakao, Sasuke 1966.
[ヤマイモ (温帯種・熱帯種) の分布領域]

- [Dioscorea (yam) : 산마 (온대종 · 열대종) 의 분포지역]
- ⑥ Distribution of Taro by Hotta, Minoru 1974.
[サトイモ科の分布領域] [토란과의 분포지역]
- ⑦ Distribution of liquor fermented by aspergillus & by saliva by Nakao, Sasuke 1967.
[酒類分類における麹発酵酒 + 唾液発酵酒の分布領域]
[주류분류에 있어서 쌀누룩발효주 + 타액발효주의 분포지역]
- ⑧ Historical Distribution of the Tiger by IUCN 1996,
[トラの本来の生息地域領域] [호랑이의 본래 서식지 영역]
- ⑨ Floral zone in Asia by Kitamura, Shiro 1957
[アジアの植物区系] [아시아의 식물구계]
- ⑩ Area & Division of Farming in China by F. Spencer 1954,
[中国の農耕領域] [중국의 농경영역]
- ⑪ Urhaimat & Diffusion Area of Austronesian by Katayama, Kazumichi 1996,
[オーストロネシア語の源郷と拡散地域]
[오스트로네시아어의 원향과 확산지역]
- ⑫ Distribution of mice (Castaneus & its Hbb-d type) by Moriwaki & Yonekawa 1993,
[ハツカネズミ (キャストネウス型および Hbb-d 型) の世界的分布領域]
[mice (Castaneus 型 및 Hbb-d 型) 의 세계적 분포지역]
- ⑬ Distribution of Typological Mythology of East by Frobenius 1938,
[東洋における神話の類型的分布領域 全 10 図 (フロベニウス 1938)]
[동양에 있어서 신화의 유형적 분포영역 全 10 장 (Frobenius 1938)]
- ⑭ Distribution of Money Cowrie (shellfish, Family Cypræidae) by Shirai, Shohei 1997,
[MA 海域におけるタカラガイ類の分布領域]
[몬순 아시아 역에 있어서 Money Cowrie 류의 분포지역]
- ⑮ Distribution of certain viruses in primates by Oppenheimer 2003.
靈長類のある種のウイルスの分布 (アフリカにも分布する) (Oppenheimer (2007))
- ⑯ Distribution of Old-World monkeys and apes in Eurasia by Lewin 2002.
旧世界猿と類人猿の(地理的)分布 (アフリカ大陸全土にも分布する) (ルーウィン (2002))
- ⑰ Areas where dog-eating is customary (in the present or past) by Suzuki 1978 based on Simoons 1962.
犬を食用とする習慣が (現在 · 過去に) ある地域 (「イヌの食用圏」、Simoons (1962) に基づく鈴木 (1978))
- ⑱ Distribution of frogs (toads) of the family Brevicipitidae by Darlington 1966.
ある種の蛙の分布地域 (*Zoogeography*, by P. J. Darlington, JR., (1966))

これらの分布のユーラシア大陸内部の境界線は、必ずしも完全に一致するものではない。特に北アジアになると、その分布が見られなくなる現象もある。しかし、大局的に見れば、MAに共通する特徴的文化現象の分布範囲、あるいは、MAの領域の外延部での境界線を特徴付けている現象と見なすことができる。

このMA領域には、言語と神話と気候、そしてまた、植物・動物・文化等、様々な文化人類学的現象が共通して現れている。それらの多くには、MAという気候との関連性が認められる。例えば、サトイモ・ヤムイモ・コンニャクイモ等に代表される種々の芋類と、神話でもいわゆる「**ハイヌウェレ型神話**」*との関連性などである。（*「**ハイヌウェレ**」神話とも。世界各地に見られる食物起源神話の型式の一つで、殺され埋められた死体から作物が生まれたとする神話の類型）。

また例えば、「**類別詞**」は、MAが周囲の領域の比較的乾燥・冷涼な土地柄に比せば、一定の雨量や水利に恵まれているため食料となる豊潤で多種多様な動植物（の名称）が多い故にその事物の認知や分類にも、弁別しやすい類別範疇が発達した、と仮説的に解釈することができる。モンスーンが常に定期的に水をもたらすので植物が多様となり、植物が豊かにあれば草食動物や食料にもなる昆虫類も多種豊潤となって、肉食動物にも恵まれ、それらは全て人間の食料となる。おおよそ共通した食料が存在する範囲では食料の入手技術や加工技術などの共通の文化的情報が生まれてそれが共有されやすく、かつ、それが伝播する過程で何らかのコミュニケーションが行われることとなる。それらの食料の中心に上記のような主食的なイモ類があり、その分布が共通していたことがこの領域に特に大きく影響していたものと考えられる。

これらの分布現象からは、MA気候という自然環境要因が、極めて長期に互って、植物・動物、食物栽培、動植物加工や動植物移動ほか、文化・言語、言語を媒介とする文化（例えば、神話分布の共有）の形成に、徐々に長期にわたって影響してきたであろうことが推察され、分布はその結果を示していると考えられる。

さらに興味深いのは、人類学的に見ると、MA文化圏の領域は、東洋人つまりモンゴロイドが、インド西方からアジア・太平洋周辺に拡散していったルート・範囲とかなりよく重なっているという点である。今後は、MA文化圏と、モンゴロイドの拡散による文化形成との関連性も研究していく必要がある課題と思われる。

これらのうち、その領域が比較的明確でかつ広域に互っている、**類別詞**、**モンスーン・アジア気候**、そして**神話分布**は、ほとんどその範囲が重なっている。それらは、アジアから環太平洋に及んでいる。これらの多くの分布範囲がほぼ重複しているのは偶然とは見なし難い。上に言及した事例以外にも、相互に何らかの影響関係があったものと推定された。

これらの現象の中で、植物・動物の分布ほか、多くの現象に影響を及ぼし得るのは「**気候**」

的均質性と考えられた。それゆえ、これらの共通現象を極めて長期間に亘って直接的に間接的に形成してきたのは、「モンスーン気候」という自然環境にその第 1 義的要因があると結論付けられる。世界的に見ても、このように多くの文化的特性が重なり合う広域の領域は、いまだほかに見出せない。これらの文化的共通性に着目し、この領域を仮に「Monsoon Asia Cultural Sphere、MA 文化圏」と名付けることにしたのだった。

また、そのユーラシア大陸側の領域の外延部には、ほぼ一定の境界線を設定することができる。それを、世界的動植物分布境界線の命名法に従い、「Monsoon Asia-ABE-Line」(モンスーン・アジア-安部線)と仮称することとした(【図 1】参照、安部(2003. 3)、最新の情報は安部(2025. 3c)参照)。

3、モンスーン・アジアの東アジアを南北に区画する「M・A・中央気候線」

MA の中を詳しく見ていくと、東アジアの日本列島・朝鮮半島(韓半島)・中国大陆には、南北での気候の境界線がある。

また、気候の境界線の付近には、気候の影響で、文化的現象でも境界が見られる(【図 3】、安部(1999. 9)以降)その位置はおおよそ、最寒月である 1 月の平均気温 0 度の等温線を境界とするもので、冬季に氷点下になるかどうか、重要な要因になっていたと考えられる。

その境界線の位置は、中国では既に漢の時代から文化境界として知られており、「秦嶺山脈—淮河線」【注 2】という名称を持つ。それは、中国の歴代国家形成にも影響してきたことが知られている。安部(2003. 3)では、その境界線も含め、中国大陆・日本列島・朝鮮半島の文化的境界線をひと続きの連続するものと解釈した(「モンスーン・アジア中央気候線」と名付けた)。つまり、気候の「温暖—寒冷」によって、アジア南北における方言と文化が南北に 2 分されているのである。それぞれ「アジア北方文化圏」、「アジア南方文化圏」とに分けることができる。

興味深い点は、その境界線が、旧石器時代の「細石刃文化」の拡散ルートにも認められる点である(【図 7】)。それゆえ、アジア・環太平洋という広大な MA 気候の範囲の中であって、この気候境界線は、古くからこの領域内の文化にも影響を及ぼした境界線であったことが分かる。今後は、MA 文化圏形成過程におけるこの気候境界線の影響についても研究が必要と考える。

4、日本語・朝鮮語・中国語における南北方言音声の共通現象

【表2】 東アジアの南北音韻対応 [b・p - m] 交替

〈沼・泥〉に見られる [b・p - m] の東アジアの南北音韻対応の法則（※は推定位置）

音韻対応		半島部	列島部	大陸部 [中国語否定詞] (橋本萬太郎(1978))
*b, p 北方音	破裂音	朝鮮語※ nup (*北部朝鮮語)	アイヌ語 nup 日本語 nuba	不*piuə(g) 弗*piuət 非piuə(d)
m 南方音	鼻音	新羅語 numa	日本語 numa	無*miuəg 勿*miuət 微miuə(d)

「MA 中央気録泉」(安部 1999.9) の南北における東アジアの音韻対応の法則 [p・b - m 対応]

【表3】 東アジア古層言語の「音韻対応の法則」の理論的再構成（試論）(安部1999)

The Triple Pairs of Sound Correspondence in Old East Asian Languages

東アジア地域 East Asia Lang.	両唇音 歯茎音 唇軟口蓋音～声門音 Bilabial Alveolar Labial Velar~Glottal	Distinctive Ftr. 口音性 Oral / 鼻音 Nasal
北方子音 North Consonant	b ~ p' — d ~ t' — g ^w ~ k ^w	[Oral 口音性] Plosive 破裂音
南方子音 South Consonant	m — n — { *ŋ (~ *Y) p → Φ → h }	[Nasal 鼻音性] Nasal 鼻音
(地域的変異) Local Variant	《 r 》 《 j 》	《異層語の影響?》 《the Influence of Other Staratum?》

【表3】注:[d / t - n - r - j] 対応の縦列について補足する。[d / t - n] 対応は [b / p - m] 対応とパラレルな関係にあるが、その例には「どくーのく(退)」「シダーシナ(時)」等がある。一方それ以外の対応関係が複雑する。「うどんーうろん(饅頭)」「ココダーコクラ」等に現れる [d - r] 対応、断定の助動詞「ダーヤ」に現れている [d - j] 対応【*語源「読」と和語「ヨム」とその*推定語源「読」の字音の古代音での [d - j] も考慮する】、古代助動詞「ラルーラユ」や命令形の「(見) ローヨ」等に現れる [r - j] 対応である。これらは西日本でも特に《熊野-奈良-福井線【:】以西(新潟を含む)に偏る傾向をもつ(下記※参照)》。【これらの内、[t - r] には「テンチウーテンリウ(天竜)」の他、日本語 t と朝鮮語の r / l (蜂、水等)の音韻対応も関わる可能性がある。[d - j] 対応は「方言圏α」(安部(2023))の領域で特徴的である。】その [d - j] 対応の [j] の口蓋化による [dj-] が要因と推定される [d - dj / d₃ (⇒ dz, z)] による、いわゆる「ダ行-ザ(ジャ・チャ)行」交替である助動詞「ダ(d)-ジャ(dj, d₃)-ヤ(ja)」や、それがサ・ザ行に及ぶ「ヒザーヒダ(膝・襲)」のいわゆるダ行-ザ行交替も、この [d - j] 対応に関わることも推察できる。西日本でいわゆる「ダ行-ラ行-ザ行の混同」が多い背景は【表3】の対応を仮定することによって解釈できる。総じて、[d / t - n - r - j] の交替パターンが(西日本内で)生じている。通時的には、その地域差と対応現象から見て、(1) [d / t - n] ⇒ (2) [d - j] ⇒ (3) [d - dj / d₃ (⇒ dz, z)] という史的関係が想定できる。中でも、「ダ行・ラ行・ザ行の混同」の領域の西側境界(上記【:】)が目されるが、それが、様々な音声上の西日本側偏在現象の中でも、中輪方言の西端線でも糸魚川・浜名湖線でも「なく」、むしろ京阪式アクセント分布の西端線以西および五段動詞ウ音便範囲のほぼ西端線以西という偏在である点は、諸々の音声・音韻現象の分布範囲の形成プロセスを総合的に考えていく上で、極めて重要で注目される分布範囲であると考えられる。(※上野善道(1989)『音韻総覧』の「13 ザ行・ダ行・ラ行の混同の有無」の言語地図参照)

次に本稿での主題である東アジアの3つの言語、日本語・中国語・朝鮮語を、3章で指摘した気候境界線の視点から見てみることにしたい。気候境界線という同一の自然要因と地理的連続線によって、日本語・中国語・朝鮮語の3つの言語は、それぞれ南北方言に2分されていることを指摘することができる。それは、中国語の北京官話系方言—南方広東系方言、日本語の日本海側北方方言—太平洋側南方方言、そして朝鮮語の場合はやや複雑だがおおむね高句麗方言—新羅・百済方言である（安部(2005. 5)）。

注目されるのは、この3言語の南北方言を対比すると、中国語・日本語・朝鮮語それぞれに南北方言の間に共通したある程度の「音韻対応」(Sound Correspondence) の傾向を指摘できることである（以下ではいずれも線の左右が「北—南」を示す）。それは、結論を先取りして示せば、次のような北—南間での相違である（【Chart 1】、安部(1999)『玉藻』35を改編、そのうち「b—m」対応については安部(2005. 5)でも取り上げている）。

◆唇音、歯音、(唇)口蓋音に見られる南北の対応

- 1) Labial= [b・p—m]
- 2) Dental= [d・t—n]
- 3) Labial Velar = [*g・k・x・χ・h—*g^w・*k^w・p・f・Φ]

このうち、「1) Labial=[b・p—m]」は、橋本萬太郎(1978)が挙げる中国語の否定辞「不、佛、非」—「無、勿、微」に見られる子音「p—m」の対応を踏まえている（【表3】の右側を参照）。日本語（方言）で言えば、北の破裂音「b」に対する南の鼻音・唇音の「m」となる事例である（例えば、牛の鳴声由来の「べー」類と「モー」類が該当）。中国語で言えば、【表3】の右側を挙げた橋本萬太郎(1978)の中に挙げられている言語地図【図8】「中国語における南北の「k-p・f-m」：否定語の南北方言での相違（鈴木秀夫(1987)）」の中に認められるものである。上記【表3】で言えば「3) Labial Velar = 「k-p・f・m」が該当する」。

以下では、「*g・k・x—*g^w・*k^w・b・p・f・Φ」の例を取り上げ、地図を示して解説する。まず、3言語それぞれにおいて、現在指摘し得る該当する言語事象は以下の通りである。それを元にして、3言語それぞれにおける南北方言語形を示すと、後の【表1】のようなものが指摘できる。

◆日本語

- ① [kitu -- pitu] (櫃、ヒツ), [suka・si -- supa・si] (酸っぱい)。【図9①】
- ② 「北アクド—南アド<アウド<*アフド」(「踵の言語地図」参照、北のアクドと南のアドが確認できる)【図9②】

東アジア言語（日本語・中国語・朝鮮語）の南北方言におけるある種の音韻対応 [k・x - p] < [*kʷ]

- ③ 「北クジナー南フジナ・ムジナ」（「タンボボの言語地図」参照、北にクジナがある。南の語形としては、この地図には表れないが、フジナ（h < p 音）は大分県大分郡、m 音のムジナ、ムチナ、b 音のプチナが「《むじな》《むちな》《ぶちな》勢州※ 034 ※ 039」（『日本方言学大辞典』）、また、文献では平安期の「フヂナ」が「*本草和名〔918 頃〕「蒲公草 一名 樗草〈上江項反 下奴豆反〉和名布知奈」」に確認できる。【図 9 ③】

◆中国語 「火」における [xwə・xua - f・p]（そのほかの語形における同様の南北での対応語形は【図 10-①、図 10-②】参照）。

◆朝鮮語 「城・忽（村落）」における [xul]（[kor]、[hor] など音価は諸説あり）- puri (piri) / pul (pŭr) の南北方言（李崇寧(1967)ほか、『三国史記』のこの地名表記については先行研究多い。李芳漢(1983)では高句麗語「[xuət] 忽」を同源と解釈する）。【図 5 -①、図 5 -②】

これらの方言音声の対応位置は、【図 1】に示した「気候境界線」を境界として南北での相違を示す。それぞれの南北方言での相違からは、気候境界線の位置での南北での対立をなしていることを確認することができる。

これらは概ね、北における硬口蓋から喉音（喉頭音 laryngeal sounds、喉音 guttural consonant）にかけての発音と、南における唇音という対立で類型性があることがわかる。

【Chart 1】 On the Sound Correspondence ‘ b/p—m, d/t—n, *g/*k, x, h—p・b (< *kʷ),’ between North and South Dialects in East Asian Languages; Japanese, Chinese and Korean.

East Asian Lang.	Bilabial	Alveolar	Labial, Velar (Labial Velar) [k or p < *kʷ Double articulation]	distinctive feature
North Dialect	b / p	d / t	*g/*k, x, ɣ, h, *#h 【※ note】 ◆注	plosive
South Dialect	m	n	p, ɸ, f, *kʷ, *gʷ, *#hʷ, ku, gu, 【※ note: #h = voiced [h]】	labial, nasal?

【概略、北方がおおむね破裂音（plosive）的傾向、南方が nasal か labial 的傾向で対立する傾向がある。◆注 = この部分は k-p 対応の理論的祖語形 [*kʷ] の変異形で、喉頭音（Laryngeal sounds）、喉音（guttural consonant）に関わる。】

5、日本語の南北方言対立における音声的傾向

ここでは、日本語における南北対立方言の他の事例を確認しつつ、それらでの音声の特徴を示しておくことにしたい。安部（2013、2014）で南北型の方言対立のうち音声上の特徴を示す現象として以下のものを挙げた（▲は北方方言、▼は南方方言を示し、▲▼は北・南で相違する特徴を示す）。

◎音声 (唇音化、口蓋化、喉頭化等の音声現象に関わる事例が多い)

音声① ▲▼「ボウーオウ(追)」の〔唇音 bo—母音 o〕(唇音化) (LAJ147 図「鳥追い歌」・189 図「鬼ごっこ」) (安部 2008. 3)

音声② ▲▼地名「bu—u 対応」〔budo 葡萄—udo・uto 宇藤・宇都〕(唇音化) (安部 2008. 3)

音声③ ▲▼「キツ—ヒツ(櫃)」の〔*k^w—p 対応〕(唇音化、喉頭化) (安部 2009. 3)

音声④ ▲▼「スッカ—スッパイ(酸)」の〔*k^w—p 対応〕(唇音化、喉頭化) (LAJ41 図「酸っぱい」、安部 2009. 3)

音声⑤ ▲▼「アクト対ア(フ)ド(踵)」の〔*k^w—p 対応〕(唇音化、喉頭化) (LAJ129 図「踵」、安部 2009. 3)

音声⑥ ▲▼「セ・ゼの発音の口蓋化・喉音化(ヒェ・ヘ)」(口蓋化) (「日本方言音韻総覧」掲載図)

音声⑦ ▲▼「u < i (フガシ(東)・フゲ(髭))」(口蓋化) (LAJ11 図「東」・12 図「髭」、鏡味明克 1984)

音声⑧ ▲▼四つ仮名における「一つ仮名地域／zi／([i] or [ü])」(口蓋化) とそれ以外の地域 (「日本方言音韻総覧」掲載図)

音声⑨ ▲▼開音合音の残存における母音の広狭の南北 (▲開音が広母音 a : / ɔ :、▼合音が狭母音 u :) (「日本方言音韻総覧」掲載図)

◎アクセント

アク① ▲▼アクセントが母音の広狭により変化する地域▲と変化しない地域▼ (口蓋性・唇音性、母音イ・ウの問題?) (真田 1989)

これらを、ある程度の共通性がある現象ごとに整理してみると、次の諸点が指摘できる (以下安部 (2011. 3) による)。

- | | | |
|-------------|-----|--|
| A 唇音性に関わるもの | A—a | 「母音の b 音化 (破裂化)、唇音性付加」音声①② |
| | A—b | 「k—p 対応」(<*k ^w) 音声③④⑤ (北の k 音の側から見ると喉頭化)
南の P 音側から見れば唇音強化 |
| | A—c | 「u < i」「中舌音 < i、u」(口蓋化、円唇化、あるいは母音の (前から) 中央寄りへの移動とみるべきか) 音声⑦⑧ |

B 口蓋化に関わるもの 音声⑥⑦⑧

A 群の特徴は、円唇性をもつ母音ウとオがその円唇性を強めた結果、破裂音 b へとなったと解釈されるなら、北方がより円唇性が強まるという点では、音声⑦音声⑧の現象、つまり、音声⑦イ母音がウ母音で現れる特徴、音声⑧イとウの区別が無くなる現象と近似する傾向と

して、下記のように捕らえなおすことができるかもしれない。

○A群では、南方に比して北方方言でより唇音性が強まる特徴がある。

Bの、音声⑥⑦⑧の現象は、中舌化も含め、別の角度から見ると口蓋化という見方もできよう。

これらを改めて、2つの点、即ち「k-p」音韻対応、口蓋化から整理すると次のようになる。

◆ 「k-p」音韻対応

音声③ ▲▼「キツーヒツ(櫃)」の〔*kw-p対応〕(唇音化、喉頭化)

音声④ ▲▼「スッカイスッパイ(酸)」の〔*kw-p対応〕(唇音化、喉頭化) (LAJ41 図「酸っぱい」)

音声⑤ ▲▼「アクト対ア(フ)ド(踵)」の〔*kw-p対応〕(唇音化、喉頭化) (LAJ129 図「踵」)

これらは、「k-p」(<*k^w)音韻対応の一連の現象と解釈される(安部(2011. 3)参照)。

◆ 口蓋化

音声⑥ ▲▼「セ・ゼの発音の口蓋化・喉音化(ヒエ・ヘ)」(口蓋化) (「日本方言音韻総覧」掲載図)

音声⑦ ▲▼「u < i (フガシ(東)・フゲ(髭))」(口蓋化) (LAJ11 図「東」・12 図「髭」、鏡味明克 1984)

音声⑧ ▲▼四つ仮名における「一つ仮名地域／zi／」(口蓋化)とそれ以外の地域(「日本方言音韻総覧」掲載図)

これらには、口蓋化という点での共通性が指摘できる(安部(2011. 3)参照)。特に、音声⑦⑧は母音i・uに関わる口蓋化という点で共通する。北方での口蓋化現象の傾向については、安部(2013. 3)「東アジア言語(日本語・中国語・朝鮮語)の南北方言の音韻対応から推定された紀元前1万年前の『呼気量変化』(口腔鼻腔流出量比率変化)とその要因について」において、その要因を解釈してみた。

上に示したスッパシとスッカシの関係と語源*sukwa-siとは、この二つの語形の類似性と分布パターンから次のように推定できる(安部(2007. 10)、安部(2009. 3)、安部(2011. 3)に詳述した部分がある)。この二語が相違する部分は子音のk、pである。古代日本語においてカ行とハ行(古代の発音ではハ行はP音なのでパ行)との交替形が、例えば以下のように少なからず確認できる。

○カムーハム(囁)、ククム・フクムーフフム(含)、ノコギリーノホギリ(鋸)、アクトーアフド(踵)、クナトーフナト(神名)、クスベーフスベ(痣・黒子)、クスブーフスブ(燻)、キタカミーヒタカミ(北上・日高見は同源)。カカーハハ(母)、カユシーハユシ(映・痒)(後者2件は安部(2000. 12)にて指摘)。

このように子音 **k - p** が交替形を生じるのは言語学的には世界的に知られていて、その共通する遡源として、唇音と軟口蓋の二重調音である唇軟口蓋音 **[*kʷ]** が理論的に設定されている (例えば、高津春繁(1954) p.60 以降参照)。

そのような言語学的解釈を踏まえるなら、sukasi、supasi の理論的共通遡源形は、*sukʷa・si (強調形は*sukʷa・si) となる。**k - p** 音はともに **[*kʷ]** からの変化形ないし異音という関係になり、東北では **k** のス(ッ)カイ、関東で **p** のスッパイで現れたことになる。(関東以南の「スシ (酸し)」が広がる以前は、関東以南全域にスハシが分布したと推定される(安部(2011))。

kw が **パ** になる日本語での事例としては、キリシタン資料『日本大文典』に記録された長崎方言における「菓子」(古い発音は **kwasi**) が **パシ** になる例が知られており、南での **p** 化現象傾向も確認できる。次に、**k - p** 対応での異音が、地理的に南北で分かれて分布する事例には、同様の例として、**k - p** 交替形をもつ「ヒツ (櫃)」に対する **k** 語形であるキツが挙げられる (安部(2009. 3a)参照)。キツの方言語形の分布は、『日本方言大辞典』の報告例を地図化することで分布を確認でき、**k** 語形のスッカイとまったく同じ範囲に分布し、この解釈の妥当性を言語地理学的にも裏付ける (【図 9-①A】 日本語方言における南北 **[k - p]** 対応:「キツーヒツ」(櫃: 木桶)参照)。

また、スカシ・キツの 2 つの事例での分布とは完全に一致するものではないが、同様に南北で **k - p** の語形が現れるものとしてアクトーアフド (踵) の分布がある (【図 9-②】 日本語方言における南北 **[k - p]** 対応:「北アクトー *アフド(>アウド>南アド)」(踵))。これは、アクトーアフド・アド (←アウド←アフド) の **k - p** 対応と解釈できる。**p** 形に由来するアフド・アドが中部以南 (中部と九州) に分布しており共通している。

また、「タンボポ」にも「北クジナー南フジナ・ムジナ」の対応がある (【図 9-③】 参照)。この言語地図には、南方の語形は表れていないが、【図 9-③】に記載したように非北部の文献例が辞書類にある。

これらの一致は偶然ではなく、何らかの歴史的地理的な条件による **k - p** 対応の地理的分布傾向と位置付けられる (安部(2007. 10)、安部(2009. 3)掲載 のアジア・太平洋の「スッパイ」の言語地図参照)。

6、音韻対応の一傾向

4 節にて 3 言語の「南北方言音声の共通現象」を紹介し、そのような音声的対応の理由を考察するために「5 日本語の南北方言対立における音声的傾向」の諸相を検討した。これらの事例では、各言語内での南北の方言対立をまずは示している。

東アジア言語（日本語・中国語・朝鮮語）の南北方言におけるある種の音韻対応 [k・x - p] < [*kw]

【Chart 2】 東アジア言語（日本語・中国語・朝鮮語）における「*g・k・x—*g^w・k^w・b・p・f・Φ」

	North—*g・k・h・x	South—*g ^w ・k ^w ・b・p・f	意味 (meaning)
日本語	sukka-i kitsu	suppa-i pitsu	酸っぱい (sour) ひつ 櫃 (bucket made by wood)
朝鮮語	kor, (xur, hor, /kol, xul, hol)	puri (piri)/ pul (pīr)	村落・城邑 (village)
中国語	xwər, xua, huo	fo, fei, pui (v-, b-, m-)	火 (fire)
日本漢字音	k (*k ^w)	w (絵 we、恵 we、和 wa)	日本語の漢音 (北方)/ 呉音 (南方)

(【図 10 - ①・②】 参照、安部(2025.3b、2025.3c)も参照)

【表 1】 M A 文化圏内の言語の「火」を表す語 [*poi ~ *apoi]

ABE (2025)

日本語 Japanese	[hi < pi, po < *ʔpo < *ʔpoi < *apoi]
中国語 Chinese	[huo (xuə・xua) < hua < *xwər 上古音 (<*k ^w uər) < *puər < *puəi < *ʔpuoi < *apoi]
アイヌ語 Ainu	[apé < *apui < *apoi]
朝鮮語 Korean	[pul < pīl < *pui < ?]
南島語 Austronesian	[*apuy < *apui < *apoi]
アルタイ語祖語 Proto Altaic	[*p ^o ore] (fire, burn)/Greenberg (2002), Eurasiatic, [*par]

【参考：以下は Greenberg (2002) の「火」。日本語は [pi] とあるが祖語形 [*po] と再構成すべき。】

153. FIRE₃ *par*

PROTO-INDO-EUROPEAN *peṷōr ~ *pūr, *paəwr̥ (W), Greek pūr, Hittite paḫḫur, Tocharian A *por*, Tocharian B *puwar*, Umbrian *pir*, Old English *fȳr*, Armenian *hur*, English *fire*.

YUKAGHIR: Kolyma *par* 'cook.'

PROTO-ALTAIC *p^ore 'fire, burn,' Proto-Turkic *ört 'flame, burn,' Old Turkic, Yakut *ört* 'steppe fire,' Tatar *ürt*, Turkmen *örte* 'get burnt,' Chuvash *virt* 'steppe fire.' Middle Mongolian (*h*)örde- 'burn, flame up,' Written Mongolian *örde* 'burn,' Khalkha *ördö* 'burn,' Kalmyk *ördə* 'burn' Proto-Tungus *puri- ~ *piri 'to dry (over fire),' Manchu *ḟariṅg a* 'dry,' Evenki *huri* 'dry.'

MIDDLE KOREAN *pīl*, modern Korean *pul* (MLC 832).

OLD JAPANESE *pi*, modern Japanese *hi*.

AINU *ape parse* ~ *ape parparse* 'fire burns' (dialects 1 and 3, Hattori 105: 56), *parase* 'burn.'

GILYAK *paru*- 'burst into flames.'

• SM 82

通常、音韻対応と言う場合、多くは同一言語内か、既に同一語族と解釈されている言語間での対応に対して使用される。一方、3言語間での共通性については、まだ同一単語に共通して見出せている現象ではないので、そのような意味での“音韻対応”とは言えないかもし

れない。しかし、何らかの音声的共通背景をもつ対応現象、と解釈することはできよう。あるいは、同一単語における事例としては、南北の相異の地理的位置がまだ明確でないが、次の「火」の子音の対応例が該当する事例と言えるかもしれない。

上述のような単語での、各言語内での規則的音声的対応の傾向、しかも、共通した気候境界線の位置での南北対応は、偶然ではなく、一種の音韻対応事例と考えておくことがよりふさわしいと思われる。それは、インド・ヨーロッパ語族における東西（南北？）方言にあたる 2 大分派（centum と satem）での対応と同類のものである可能性がある、と考えられるからである（安部(2013)参照）。それゆえ、ここでは、あくまで「ある種の音韻対応の傾向」として提示しておくこととする。（その要因についてのひとつの解釈(呼気量と呼気の鼻腔・口腔での使用の相異)としては、安部清哉(2012.3)で考案してみたことがある。）

なお、【Chart 2】に示した事例では、[k・x・h-p・f・w] の例しかないが、それ以外の理論的な検討と、安部清哉（2013. 3）の印欧語における南北（東西）の対応をも検討して、理論的に再構成したものとして、ここでは [^{*}g・k・x — ^{*}g^w・k^w・p・f] を対応例として提示している。これらは、東アジアの言語の南北での音韻対応であると位置づけられる。このように、対立する地理的位置も同時に示した「音韻対応」の指摘は初めてのものであろう。

この指摘は、日本語・中国語・朝鮮語ばかりでなく、東アジア言語の研究にとって重要である。なぜなら、この指摘によって、例えば【表 1】のように、これまで別語源とされてきた基礎語彙「火」の語源が、皆同一語源（推定祖語形 [^{*}apoi]）であることが証明可能となるからである。

7、おわりに

本稿では、アジアの東側、日本語、朝鮮語、中国語それぞれの方言の南・北の間に見出せる音声の相異（音声的対応関係）に、3 言語に共通して現れたいわゆる「音韻対応」ともみなし得る一定の音声的傾向について報告し、考察してみた。

その南・北での相違が現れる境界線の位置は、【図 3】に示した「言語・文化・気候の複合的境界線」の位置であった。それは、日本語方言ではいわゆる南北型の方言境界線である「南北方言境界線」（【図 6-①】参照）にあたり、朝鮮語においては著名な「南・北方言群の等語線帯」（【図 5-①】、【図 5-②】も参照）の位置がそれに相当する、と解釈された。中国語においては、時代が現代に下るに従い北側の官話系統の北方方言（普通話に代表される）の影響が南下してきているために、新しい時代の方言的境界線は南方にずっと下がっていると解釈されるが（例えば【図 8】にある広東付近の www 線等）、古くは中国大陆の言語文化境界線であるいわゆる「秦嶺・淮河線」がその位置に該当すると解釈される。その位置は、現在でも河川名での南北の対照的分布範囲が示す南北境界線に残存していると解釈さ

れる（【図4-①・②】参照）。そして、これら3地域での言語・文化の総合的境界線は、【図3】の境界線のように示すことができる。（朝鮮語での境界線が、他の2言語よりやや北側に位置するのは下記のように、気候の影響故との解釈に立ち、暖流の影響故に北寄りに押し上げられていると仮定している。）

ではなぜ、【図3】のように、3地域の3言語でほぼ同じような緯度で、東西にひと続きの横一線的な境界線をかたちづくって3言語の南・北方言が形成されているのだろうか。

その要因の第一義的背景としては、気候の南北での大きな（急激で断絶的な）相違があると解釈される。それが、他のあらゆる文化人類学的な諸現象全般における南北での相違を生み出す要因となっている。それに拠って、直接的・間接的に人類、民族、民俗などの範疇での人間の行動において、南北での移動、交流、交渉、均質化の障害を生み出し、南北の言語（方言）の混淆（混在・均質化）の進行を減退させ、また、南・北それぞれの内部での言語・文化の固定化・滞留化を引き起こした。畢竟、それが南・北間での断絶的相違、即ち方言境界線を集積させ、長期間のうちに両方言間での大きな相異を蓄積・集成させることになった、と結論付けられる（安部(1999)以降の関連拙論および【補注】の文献参照）。

文化人類学関係における南北での相違を示す諸現象の具体的事例については、安部(2006.3)にて多くの分布地図を掲載し、その影響範囲の広さ、多様さ、深さを提示した。その後、収集した同じような分布を、本稿でも【図11~16】に追加しておいた。

またなぜ、語彙、文法、音声での単なる南北相違というだけでなく、特に音声的現象において3言語間にて本稿で示したような一定の共通性をもつ傾向が（一部であれ）現れ得るのか、という点が問題となる。それについては、【図3】のように東アジア側に境界線が現れるならば、類似する現象（自然現象）はヨーロッパ側にも、見出せると推定した。その結果、見出せたのがインド・ヨーロッパ語族の centum-satem の2大方言分派の境界線（安部(2013)）である。その境界帯でも、言語（方言）の2大分派の境界だけでなく、気候や生物の境界が重なり束をつくっている言語・文化の複合境界帯と言えるものであった。そして、東アジア側とヨーロッパ側とで共通している境界の現象は、やはり気候（気温と降水量）であった。そのことから推察して、安部(2012.3)にてその要因（呼気量）についてひとつの試論をかつて提示してみた。そこでの結論は大局的には現時点でも要因の少なくとも一部であろうと考えている。

本稿で取り上げたアジアの南北間の音声現象をなぜあえて考える必要があるのか。ひとつには、これらの言語の背景に、モンsoon・アジアという領域が見られるからである（安部(2025.3 c)）。もうひとつは、上記のような3言語の南北方言境界線は、それと成立要因を同じくすると見なせるインド・ヨーロッパ語族での南北間の言語（方言）境界線、すなわち2大分派 Centum-Satem の南北（東西）の境界線とある意味でパラレルな関係があるとみなせるからである（安部(2013)）。このアジアとヨーロッパの東・西2つの南北方言境界線

における言語対応関係を、洋の東西で比較しながら研究を進める必要がある。そして、それら「アジアの古い言語状態」の解明には、モンスーン・アジアの河川名（水名）（安部(2025.3 b)）の研究が新しい視点を提供している（【補注 2】参照）。また、日本語の方言分布の形成過程の解明も、そのような言語史研究に寄与するところが大きい（ABE(2025)、安部(2023)、安部(2023.5)）。

それらと本稿（安部(2025.3 a)）とを併せて見ていくと、日本語の系統、日本語の形成過程、すなわち日本語の起源については、従来の研究の蓄積を改めて見直していく必要があると考える。これらについても、ご批判をいただければ幸いである。

さて、4 章で指摘した【表 1】「 $*g \cdot k \cdot x \cdot x - *g^w \cdot k^w \cdot b \cdot p \cdot f \cdot \Phi$ 」を含め、この音韻対応は、アジア言語史の解明にとって重要である。なぜなら、例えば、これまでまったく別語とされていた中国語の「火」（huo [xwə · xua]）が、他のアジア言語と関連付けることが可能となり、はじめて、他のアジア言語の「火」と同源と見なす「理論的裏づけ」を与えることができるからである。AN 語などの祖語形にある p 音と同じでないが、共通する祖語形 [k^w] からの変化形で、南の p 音に対応する [k^w , $*k$, $*x$, $*w$] などの音であることの説明が可能となる。

MA 文化圏のような、極めて特異な広域の領域の指摘は、この一連の研究が世界的にも最初のものであるから（ABE(2006)など）、今後批判的検討が必要であることはもちろんである。しかし、MA 文化圏は、モンゴロイドの文化としても、人類史的に見ても、極めて興味深い領域であることは明白であろう（安部(2025. 3c)参照）。この領域の危機言語の調査など、貴重な研究データ収集を急ぐことを含め、今後、この領域を対象とした国際的・学際的研究が盛んになることを期待したい。

◆【注】

【注 1】 東アジアの東北部は、気候が寒冷化していく関係で、諸現象の分布が希薄になり、Cline（地理的漸移勾配）をなすと解釈される。

【注 2】「秦嶺・淮河線」The Qinling-Huaihe Line (Chinese: 秦嶺淮河线; pinyin: Qínlíng Huáihé Xiàn) = Wikipedia での記載より。

「秦嶺・淮河線（しんれい・わいがせん）は中国東部[1]における年間降水量 1000mm のラインのことである。秦嶺・淮河ライン、チンリン・ホワイ線ともいう。ちょうど年間降水量 1000mm の等量線が秦嶺山脈と淮河を結ぶ線と一致することからこの名前で呼ばれ、一般的にこの線より以北が小麦地帯、以南が稲作地帯とされている。耕作穀物の違いが、食文化の違いも産んでおり、この線の北側が麵食・パン食、南側が米食という主食を分ける大まかな線と考えることもできる。中国では秦嶺・淮河線が 800mm 等降水量線であり、1 月の 0 度等温線である。伝統上これを境に、「南北」が分かれる。気候が大きく異なると共に農業生産や生活習慣が大きく異なる。」

東アジア言語（日本語・中国語・朝鮮語）の南北方言におけるある種の音韻対応 $[k \cdot x - p] < [*kw]$

【注3】 かつて安部（1999, 玉藻 35）において、日本語方言内部の分布状況から、次のような南北間の音韻対応の傾向を試案して再構成してみたことがある。これは、まだ修正が必要であったが、本文で示した表は、これが元になっている。この表のうち、本文の【表3】に示した「1）Labial=[$b \cdot p - m$], 2）Dental=[$d \cdot t - n$], 3）Labial Velar=[$*g \cdot k \cdot x \cdot h - *g^w \cdot *k^w \cdot p \cdot f \cdot \Phi$]]は、3）に修正が加わったが、おおよそ合っている（変更なし）と思われる。）

【補注1】 「南北型方言分布」に触れている拙論の構成はおおよそ以下の通り（備忘として記す）。

1 全体的概説（定義・特徴などの解説）

○安部清哉（2013. 2）「日本語方言における『南北方言分布』（語彙音韻文法）の特徴」『玉藻』47

2 該当地図一覧（2013. 3の図が1頁大の大きさで見やすい。その後安部（2014. 3）で2図追加で現在27図）

○安部清哉（2013. 3）「日本語の「南北型方言分布」研究のための言語地図一覧」『学習院大学文学部研究年報』60

○安部清哉（2014. 3）「日本語の「南北型方言分布」の地理言語学的解釈」『東洋文化研究』16

3 個別地図の解釈（南北型方言に関する最初の拙論のみ。他は略）

○安部清哉（1999. 9）「日本列島におけるもう一つの方言分布境界線 “気候線”」『玉藻』35

○安部清哉（2009. 3）、○安部清哉（2011. 3）、○安部清哉（2014. 3）

4 アジア、ヨーロッパの方言分布との関連性

○安部清哉（2013. 3）「日本語およびアジア言語における「南北方言分布境界線」から見たインド・ヨーロッパ語二分派 Centum-Satem の境界線」『東洋文化研究』15（学習院大学東洋文化研究所）

○安部清哉（2007. 10）

5 文化、気候、呼気量などの諸現象との関連

○安部清哉（2006. 3）「アジアと日本列島における言語・文化境界線 “気候線”（摂氏0度線）——言語地理学と文化地理学から——」『学習院大学文学部研究年報』52

○安部清哉（2012. 3）「東アジア言語（日本語・中国語・朝鮮語）の南北方言の音韻対応から推定された紀元前1万年前の『呼気量変化』（口腔鼻腔流出量比率変化）とその要因について」『人文』10, pp.7-39.

○安部清哉（2013. 3）「日本語およびアジア言語における「南北方言分布境界線」から見たインド・ヨーロッパ語二分派 Centum-Satem の境界線」『東洋文化研究』15（学習院大学東洋文化研究所）

○安部清哉（2013. 5）「気候は、言語・方言を作るか？——アジア言語の “Centum-Satum 的基層語派” を区画する地理的指標となるか——」『日本語学』32-6（409号、2013年5月号）

【補注2】 河川名ナイと中国語「泥」（川）・「澮」（小川・水）

日本語方言とアイヌ語、朝鮮語にもある河川名「ナイ」が、モンスーン・アジア（MA）領域内に広く分布していることを安部（2001.8）で指摘して以来（例えば安部（2008）の分布図参照）、中国語の中の同源語の探索が課題であった。中国語の川、河、江、溝、溪、谿、峪、谿、榮などを調べても、n音で始まる漢字は出てこない。MA内に声調言語として拡大する過程で、これらの漢字語がナイを駆逐し消滅させたのか、とも思えた。一方、安部（2025.3 c）【補注】にて紹介したように、日本語の古い基礎語彙との同源語が、朝鮮語・アイヌ語だけでなく中国語や周辺言語でも見出せる事例が少なくない。その点を考慮すると、中国語のどこかに形・義を変化させて隠れているのではないかと強く思われた。そのような中、意味は風土に順応して言わば「土着化」する事例を、語彙の「寒冷地適応」という現象で再認識しながら（安部（2025.3 b））、かつて何度か訪問した中国大陸の風景を思い返していた。北はハ

ルビン・長春、南はチワン族自治州・広州・雲南省、西は洛陽・西安での記憶を手繰り寄せ、現地で何度か見た黄色い川、黄土に染まった茶色い川の光景の上に「黄河」の文字が重なり、ある漢字に思い至った。「泥」「濇」である。古音の頭子音は2字とも n 音。果たせるかな「濇」の意味には「小さな川」「水のさま」がある。「泥」は「〔説文〕十一上に川の名とする」「字通」とあり、実在の複数の河川の名前としても残存していた（『泥、泥水』『大漢和辞典』）。黄土大地の上で、河川名「ナイ」は中国語では「黄色い川、泥水」が常態化し「泥」や「濇」となって土着化を果たしていた、それが河川名「ナイ」の残影なのではないだろうか。

◆ MA の基礎語彙「ナイ」（河川・水）の中国語での同源語形「泥」「濇」

○意味変化：「水や水の流れ」⇒「土交じりの茶色い水や川」「黄河」⇒「水の混じった柔らかな土」⇒「泥」「濇」。すなわち古層の河川名・水名は中国語「泥」「濇」として土着化した。

○音変化：中国語 Chinese [ner, nei, ndei (< niei / n̄ei) < * nai < * nahdi] ネイ、ナイ、デイ、

●「泥」：『学研漢和大辞典』古音の記載 = ner-nei (ndei)-ni̯-ni (n̄i・ni)

●「泥」[ni̯ər / niei] = [Archaic Chinese / Ancient Chinese] reconstructed by Karlgren (周法高主編 (1974)『漢字古今音表』中文大學出版社、「濇」はカールグレンの再構音無し ((2)の文献参照)。

●「泥」[nai ② B] (客話方言)、[n̄ei ②] (粵語方言) ((3)の李珍華・周長楫編撰 (1998)『漢字古今音表 (修訂本)』中華書局)

◇「濇」：『学研漢和大辞典』では古音の記載なし。カールグレンの再構音も無し ((2)の文献参照)。

◇『上古音韻表稿』『漢字古今音表』『漢字古今音彙』に各古音の記載がある (以下参照)。

(1) 慶谷壽信『董同龢「上古音韻表稿」索引』文海出版社有限公司

○ 泥① 224 平 nied / ○ 泥② 224 去 nied
○ 濇① 181 上 nieng / ○ 濇② 181 去 nieng

(2) 周法高主編 (1974)『漢字古今音表』中文大學出版社

「泥」= [ni̯ər/iei/ni] = [① / ② / ③] by Karlgren

① Archaic Chinese reconstructed by Karlgren for th character '泥'.

② Ancient Chinese reconstructed by Karlgren for th character '泥'.

③ pronunciation of character '泥' in Mandarin Chinese as found in GSR.

(3) 李珍華・周長楫編撰 (1998)『漢字古今音表 (修訂本)』中華書局

	中古音	上古音	近代音	現代音	漢語方言	
					客話	粵語
濇	ni̯eŋ③	ni̯eŋ③	ni̯aŋ④	ni̯ŋ④	ナシ	ni̯ŋ⑥
泥	niei①	niei①	ni②	ni②	ni②w nai②B	n̄ei②

【付記 1】本稿は、参考文献にもあげた安部 (2007. 10) のシンポジウム論集でのレジメ原稿に拠り、その後の事例を大幅に補充したものである。そこでの中国語題名・英語題名は次の通り。

中国語題名：汉语・日语・朝鮮語所共通的“东亚南北方言”和“音韻対応”的傾向

Certain phonological correspondences in the North-South dialects of East Asian languages (Japanese, Chinese and Korean) [k, x-p], ABE Seiya

【付記 2】本稿は、以下の研究費による研究成果の一部である。関係各位に深謝申し上げます。

○ 2023-24 年度学習院大学東洋文化研究所研究プロジェクト「河川名と指示代名詞」(安部清哉)

東アジア言語（日本語・中国語・朝鮮語）の南北方言におけるある種の音韻対応 $[k \cdot x - p] < [*kw]$

○平成 15-17 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (2) 「言語成層論モデルによる日本語とモンsoon・アジア地域の言語史に関する基礎的研究」(課題番号 15520298、代表者：安部)

【参考文献】(50 音順)

あべせいや (1997) 『日本語の起源——日本語のルーツを探ったら』 アリス館

ABE, Seiya, (1998.7.28-29), "Several Strata in the Historical Formation of Japanese Dialects", (Proceedings of 2nd International Congress of Dialectologists & Glottolinguists ; The International Society for Dialectology and Glottolinguistics)

ABE, Seiya, (2003.7.29) Dialectical/climatic features and distribution of terms for watercourses in Asian languages : the case of Japanese, Korean, and Chinese, Papers of X V II International Congress of Linguists' in CD-ROM, Prague, CIL, 2003,

ABE, Seiya, (2006), On the "Monsoon Asia Substratum" and Altaic Superstratum in East Asia: A Stratificational Approach to Geolinguistics, In Guido Oebel (ed.), *Japanische Beiträge zu Kultur und Sprache*, Studia Iaponica Wolfgang Viereck emerito oblate, [The Festschrift for Doc. Wolfgang Viereck, 79-96. LINCOM GmbH, Muenchen, Deutschland.

ABE, Seiya, (2025) The Classification and Division of Japanese Dialects, *The Handbook of Japanese Dialects*, Kibe, Nitta and Sasaki edit., De Gruyter Mouton, Berlin.

安部清哉 (1996) 「〈禿頭〉の語史と方言分布——上方出自語同士が江戸語・上方語の対立をなす背景——」『国語語彙史の研究十五』和泉書院

安部清哉 (1999.9) 「日本列島におけるもう一つの方言分布境界線 “気候線”」『玉藻』35.

安部清哉 (2000) 「日本語史研究の一視点——方言国語史の視点から——」『国語論究 8 国語史の新視点』明治書院

安部清哉 (2000. 1) 「方言分布と日本語史」『国文学解釈と鑑賞』65-1 (824) 至文堂

安部清哉 (2001. 8) 「東アジア（日本語・韓国語・中国語）の河川名の偏在と方言分布・気候との相関」『韓国日本学会 (KAJA) 第 63 回学術大会 Proceedings』

安部清哉 (2001. 11) 「東アジア（日本語・韓国語・中国語）の河川名の偏在と方言分布・気候との相関 配布地図・補論」『玉藻』37

安部清哉 (2002. 5) 「方言地理学から見た日本語の成立——第 3 の言語史モデル理論としての “Stratification Model”——」『方言地理学の課題（グロータース神父記念論集）』明治書院

安部清哉編 (2003. 3) 『日本語の方言分布境界線（関越線・気候線）による方言の重層性に関する基礎的研究』平成 13・14 年度科学研究費成果報告書、私家版

安部清哉 (2003. 7) 「関東における日本語方言境界線から見た河川名の重層とその背景」『国語学』54-3

安部清哉 (2004. 7) 「地名と日本語——河川名の言語空間」『国文学解釈と鑑賞』69-7

安部清哉 (2004. 7. 10) 「日本語の境界とモンsoon・アジアという世界——水源地形名 numa < *nub (沼・泥) の言語分布——」『韓国日本学連合会第 2 回国際学術大会 Proceedings』

安部清哉 (2004. 12) 「言語地理学とアジア・環太平洋言語史」『日本語学』23-15.

安部清哉 (2005. 5) 「日本語・朝鮮語の境界とモンsoon・アジア文化圏——水源地形名 numa < *nub (沼・泥) の「b-m」音韻対応——」大韓日語日文学会『日語日文学』26 号

安部清哉 (2006. 3) 「アジアと日本列島における言語・文化境界線 “気候線”（摂氏 0 度線）——言語地理学と文化地理学から——」『学習院大学文学部 研究年報』52, pp.39-90.

安部清哉 (2007. 10) 「中国語・日本語・朝鮮語の東アジア言語におけるある種の「音韻対応」(k · x -

- p) 王鉄橋・姚灯鎮主編『国際化視野中の日本学研究——紀念胡振平教授從教 45 周年（東亜日本学国際研討会論文集）』（洛陽・東アジア日本学国際シンポジウム論文集），天津・南開大学出版社，pp.31-39, pp.638.
- 安部清哉（2008）「アジアの中の日本語」小林隆編『シリーズ方言学 1 方言の形成』岩波書店、123-167.
- 安部清哉（2009. 3a）「『きつ（にはめなで）』（『伊勢物語』十四段）の日本語方言及びアジア言語の中の位置」『国文学言語と文芸』125、pp.37-58, おうふう社
- 安部清哉（2011. 3）「日本語の味覚形容詞語彙の類型的構造および方言分布成立——「五味」とスイ・スッパイ・スッカイの語源（中国語「酢」）の再検討——」『人文』9、学習院大学人文科学研究所、pp.7-34.
- 安部清哉（2013. 3）「日本語およびアジア言語における「南北方言分布境界線」から見たインド・ヨーロッパ語二大分派 Centum-Satem の境界線」『東洋文化研究』15
- 安部清哉（2014）「方言区画論と方言境界線と方言圏の比較研究」『人文』13、21-55.
- 安部清哉（2014. 3b）「日本語の『南北型方言分布』研究のための言語地図一覧」『文学部研究年報』60、pp.21-79.
- 安部清哉（2023）「日本語方言におけるある種の「方言圏」の課題：方言境界線の類型とアクセント分布との相関性」『文学部研究年報』69、pp.39-81.
- 安部清哉（2023.5）「分布類型論、形成類型論と地理方言学」『方言地理学の視界』勉誠出版
- 安部清哉（2025. 3a）「東アジア言語（日本語・中国語・朝鮮語）の南北方言におけるある種の音韻対応 $[k \cdot x - p] < [*k^w]$ 」『人文』23.（本稿）
- 安部清哉（2025. 3b）「水名（河川名）「サワ」（沢）「シガ」（氷）小考」『学習院大学国語国文学会誌』68.
- 安部清哉（2025. 3c）「日本語の河川名の重層的形成とモンソーン・アジア最古基層（副題略）」『文学部研究年報』71
- Blust, Robert and Stephen, Trussel, (2010), Austronesian Comparative Dictionary, Web Edition. <http://www.trussel2.com/ACD/> [accessed May 2024]
- W. W. Hunter (1868, rep. 1978) A Comparative Dictionary of the Language of India and High Asia
- Greenberg, Joseph, H., 2002, Indo-European and Its Closest Relatives, Vol. 2. Lexicon, Stanford Univ. Press, California, USA.
- Hans Krahe, (1954), 『SPRACHE UND VORZEIT』（『言語と先史時代』）
- W. B. Schostakowitsch, (1926), Die historisch-ethnographische Bedeutung der Benennungen sibirischer Flüsse, UJ6-1・2 (Ugarische Jahrbücher)（表紙印刷刊行年は 1927）
- 泉井久之助（1953）（1952？）『民族学研究』17-2、いま泉井（1985）による。
- 泉井久之助（1985）「日本語と南島諸語——系譜関係か、寄与の関係か——」『日本語の系統・基本論文集 1』和泉書院
- 板橋義三（2001）「アルタイ諸言語（含朝鮮語）と日本語」『言語研究』120
- 江守五夫（1993）「日本の家族慣習の源流としての中国北方民族文化」『日本の家族と北方文化』第一書房
- 江守五夫・大林太良・烏丙安・金啓琮（1993）『日本の家族と北方文化』第一書房
- 大野 晋（1962）『万葉集四』日本古典文学大系，岩波書店

- 大林太良（1986）「東アジアの文化領域論」埴原和郎編『日本人の起源』小学館
- 大林太良（1975）『神話と神話学』大和書房
- 大林太良（1999）『銀河の道 虹の架け橋』小学館
- 奥里将建（1943）『古代語新論』三省堂、pp.485 と村山（1975）に引かれる。
- 落合いずみ（2024）「アイヌ祖語における「川」の再建—アイヌ語地名「十勝」「空知」の由来とともに—」『言語記述論集』16.
- 落合いずみ（2024）, Izumi, Ochiai, “River” in Atayalic and “fresh water” in Proto-Austronesian, *Journal of the Center for Northern Humanities*, 17
- オッペンハイマー（2007）『人類の足跡の10万年全史』草思社（原文：Stephan, Oppenheimer, *Out of Eden: the peopling of the world*, 2003.）
- 鏡味明克（1977）「地名の起源」『岩波講座日本語 12』岩波書店
- 鏡味完二（1958）『日本地名学』東洋書林原書房
- 鏡味完二（1958）『日本地名学 地図篇』日本地名学研究所（地名地図はこれによる）
- 亀井 孝（1954）「『ツル』と『イト』」『国語学』16, 初出英文論文は1953
- 川本崇雄（1993）「日本語・オーストロネシア語比較語彙表（4）」『英語英文学研究』32、創価大学英语学会.
- 環境省自然保護局（2004）『日本の植生 II.』自然環境研究センタ、「ブナ林の分布」佐竹昭広（1955）「古代日本語の色名の性格」『国語国文』24-6
- 木下研一（2003）「西日本に多い成人T細胞白血病 その病像、感染経路、予防」日沼・崎谷編『日本列島の人類学的多様性』勉誠出版
- 京都大学東南アジア研究所発行（2012. 3）『京都大学 Global COE Program 生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点 NEWSLETTER』7、G-COE 広報成果発信部会発行（甲山治編集：7号担当）
- 日下部正雄（1954）「屋外労働に適する時間」『天気』1-5、日本気象学会
- 佐竹昭広（1955）「古代日本語の色名の性格」『国語国文』24-6
- 新村 出（1916）「国語および朝鮮語の数詞について（承前）」『芸文』7-4
- 杉原薫・脇村孝平・藤田幸一・田辺明生（2012）「人類が生き延びてこられたのはなぜか（副題略）」（『講座生存基盤論』第1巻『歴史のなかの熱帯生存圏（副題略）』）京都大学東南アジア研究所（2012）
- 鈴木秀夫（1987）「民族の移動と言語の分布」『言語』16-7、および鈴木氏の先行論文
- 宋 敏（1999）『韓国語と日本語のあいだ』草風館
- 竹岡俊樹（1991）「旧石器時代の石器分析からみた左右差の起源と発展」『左右差の起源と脳』朝倉出版
- 田島和雄（1986）『図説 臨床「癌」シリーズ』9、p.66 ?）
- 都 守熙（1977）『百済語研究』亜細亜文化社
- 都竹通年雄（1953）「卷十四の『中麻奈』」『万葉』9
- 永田高志（2000）「方言に見る第三者に対する待遇表現」『20世紀のフィールド言語学の軌跡』
- 橋本萬太郎（1978）『言語類型地理論』弘文堂
- 橋本萬太郎（1981）『現代博言学』大修館書店
- 福嶋司・高砂裕之・松井哲哉・西尾孝佳・喜屋武豊・常富豊（1995）「日本のブナ林群落の植物社会学的新体系」『日本生態学会誌』45、p.79-98.
- 朴 炳采（1968）「古代三国の地名語彙攷（副題略）」『白山学報』5
- 村山七郎（1975）『国語学の限界』弘文堂
- 村山七郎（1978）『日本語系統の探求』大修館書店

李 基文 (1975)『韓国語の歴史』大修館書店

李 崇寧 (1967)『韓国方言史』韓国文化史大系 9、高大民族文化研究所出版部

李 芳漢 (1983)『韓国語の系統』三一書房 (原書は韓国)

◆【文化人類学関係】(50 音順)

赤澤 威 (1994.5)『先史モンゴロイドを探る』日本学術振興会

朝日新聞社 [編] (1989.4)『朝日百科日本の歴史全 12 巻別巻 1』

朝日 稔 (1980.10)『日本の野生を追って』東海大学出版会

安孫子昭二 (1995.2)「アスファルト」『縄文文化の研究 8 社会・文化』遊山閣

石原正敏 (1996.2)「アメリカ式石鏃再考」『考古学と遺跡の保護』甘粕健先生退官記念論集刊行会

市野尚子・竹井恵美子 (1985.8)「東アジアの豆腐づくり」石毛直道編『東アジアの食事文化』平凡社

今村啓爾 (1999)『縄文の実像を求めて』吉川弘文館

上野輝彌 (1980.11)「淡水魚の分布とその由来」(川合・川那部・水野編『日本の淡水生物—侵略と攪乱の生態学』, 東海大学出版局)

江坂輝彊 (1965)「縄文時代の生活と社会——生活の舞台」『日本の考古学Ⅱ 縄文時代』河出書房新社,
江坂 (1943, 1954) 等もあるが省略。

Yugo,ONO,1984,Last Glacial Paleoclimate Reconstructed from Glacial and Periglacial Landforms in Japan, Geographical Review of Japan, vol.57, (Ser. B), No. 1, pp.87-100,

大場秀章 (1996.2)「南北に長い国 日本の生物」(堀越増興・青木淳一編『日本の生物 (新版日本の自然 6)』第 5 章、岩波書店)

可兒孔明 (1965)『鵜飼』中公新書

片山一道 (1996)「アメリカ大陸とオセアニアへの拡散」『人類史をたどる』朝倉書店

金子拓男 (1995.3)「三角形土版・三角形岩波」『縄文文化の研究 9 縄文人の精神文化』雄山閣

河野昭一 (1974.3)『種の文化と適応 (植物の進化生物学—第Ⅱ巻)』三省堂

河村 武 (1986.4)「日本列島と周辺文化 (パネルディスカッション)」埴原和郎『日本人の起源』小学館創造選書

北村四郎 (1957)「植物の分布」『原色日本植物図鑑草木編 [I]』保育社

日下部善己 (1995.1)「環状石斧」『縄文文化の研究』遊山閣

佐々木高明 (1984.1)「提論日本海地域の基層文化」(森浩一 (1984)『シンポジウム古代の日本海諸地域』)

鈴木秀夫 (1966)「日本の気候と気候区」(石田・矢沢・入江共編『世界地理第 2 巻 日本』古今書院)

鈴木秀夫 (1978)『森林の思考・砂漠の思考』日本放送出版協会

鈴木秀夫 (1987)「自然環境と民族文化」『オセアニア世界の伝統と変貌』(民族の世界史 14) 山川出版社

諏訪哲郎 (1988)『西南中国納西族の農耕民性と牧畜民性』学習院大学研究叢書 16

関口 武 (1962)「第 2 節 水収支」(福井英太郎編『現代地理学体系 第 1 部第 2 巻 気候学』「第 3 章気候の表現」古今書院。地図原典の鈴木清太郎 1948 は参考論文にない。)

田中真悟 (1986. 7)「氷河とともにやってきたトビムシ——日本におけるアオイボトビムシの属の侵入過程と種文化」(木元新作編『日本の昆虫地理学—変異性と種文化をめぐる—』東海大学出版会)

田名部雄一 (1985)『犬から探る古代日本人の謎』PHP21 世紀図書館

『中国自然地理図集』(1984) (1998 第 2 版より)

鶴崎展巨 (1989. 5)「単為生殖をするザトウムシ」(梅谷猷二・加藤輝代子編者『クモのはなし』技報堂出版)

- 樋泉岳二（1999）「東京湾地域における完新世の海洋環境変遷と縄文貝塚形成史」『国立歴史民族博物館研究報告』81
- 中尾佐助（1966）『栽培植物と農耕の起源』岩波書店
- 中尾佐助（1967）「農業起源論」『自然——生態学的研究』中央公論社
- 中尾佐助（1978.5）『現代文明ふたつの源流』朝日選書
- 中川原捷洋・秋浜友也（1972）「エステラーゼ・アイソザイムによる東アジアにおけるイネ在来種の変異と地理的分布」日本育種学会（講演会要旨）『育種学雑誌』22 巻別冊 1, pp.79-80, 原論文の図は手書きで凡例部は「いわゆる北方進出」とある。
- Tadao,Nagata,(1960.3、長田忠男),Studies on the differentiation of Soybeans in Japan and the World,(Laboratory of Plant Breeding),Memories of the Hyogo university of Agriculture, 3-2, 兵庫農科大学紀要 3-2.
- 新妻信明（1991）「丹沢の衝突」『南の海からきた丹沢』有隣堂、柏崎一鈔子線掲載
- 西光義弘（2001. 6. 9）「類別詞の理論的考察」（文部省科学研究費特定領域研究（A）公開講演会「消滅に瀕した言語」発表資料）
- 松井健担当「第2部 §16 古土壤」日本第四紀学会編（1987）『日本第四紀研究地図』東京大学出版会
- 日本第四紀学会編（1987. 7）『日本第四紀地図』東京大学出版会
- ニュートンプレス[編]（2000. 6. 10）『ニュートン別冊』「特集 日本人のルーツ」
- 野澤 謙（1993. 11）「日本の家畜たち—ニホンザルからスイギュウまで」（佐々木・森島編『日本文化の起源』第2章、講談社）
- 橋本博文（1994. 1）『『王賜』銘鉄剣と五世紀の東国』『東国と大和王権』原島礼二・金井塚良一編、古川弘文館
- 橋本萬太郎（1981）『気候と文明』大修館書店
- 春成秀爾・小池裕子（1987）「1/400 万先史遺跡・環境圏解説『日本第四紀地図』」東京大学出版会
- 林田重幸（1974）「日本在来馬の源流」『日本古代文化の探求一馬』
- 日浦 勇（1981. 3）「昆虫遺体群集による遺跡環境の復元に関する基礎的研究」科研報告書・特定研究「古文化財」総括班『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』
- 福田正己（2003. 3）『流体的地球像』第7章 放送大学教育振興会
- 堀田 満（1974）『植物の分布と分化』三省堂
- Yoshiwo Horikawa, (1972), Atlas of the Japanese Flora : an introduction to plant sociology of East Asia, GAKKEN Co. Ltd. , TOKYO.
- 前川文夫（1977）『日本の植物区系』玉川大学出版部
- 前川文夫（1978.6）『日本固有の植物』玉川大学出版部
- 松井 健・加藤芳郎（1962）「日本の赤色土壌の生成時期・生成環境にかんする二、三の考察」『第四紀研究』2-4・5, pp.161-179.
- 宮武頼夫（1997.5）「6. 稲作・畑作の害虫（活動の舞台）」『弥生文化の研究第1巻 弥生人とその環境』遊山閣
- 森脇和郎（1983）「日本産野生マウス（ハツカネズミ）の起源」『創造の世界』47
- 森脇和郎・米川博通（1993）「遺伝子から見たアジア産ハツカネズミ亜種の分化と分布」『日本人と日本文化の形成』朝倉書店
- 安江安宣（1967.8）「Ⅲ本州西南部におけるアマゴとオオニジュウヤホシテントウの地理的分布の類似性—淡水魚と昆虫の生態地理学的考察—」『自然—生態学的研究』中央公論社.

吉田正敏 (1978) 『気候学』 大明堂

吉野正敏 (1999) 「モンスーンアジアの環境変化と稲作社会 (副題略)」『地理学評論』 72A-9

吉田集而 (1993.11) 『大豆発酵食品の起源』 (佐々木高明・森島啓子編『日本文化の起源—民族学と遣
伝学の対話—』 第 6 章、講談社) より。原図論文は、Tadao, Nagata (1960)、長田忠男『兵庫農科
大学紀要』 3-2.

渡辺誠 (1986.7) 「縄文文化再考」坪井清足編『縄文との対話 (日本古代史 2)』 集英社、典拠資料不掲載
R. ルーウィン (2002) 『ここまでわかった人類の起源と進化』 (てらべいあ)

Phonological correspondence [k/x-p] (<[*kʷ]) in the North-South dialects of East Asian languages (Japanese, Chinese and Korean)

ABE Seiya

Certain areas of Asia and the Pacific Rim are recognized as having culturally shared phenomena with climatological characteristics, known as “monsoon climates” (Monsoon Asia). Many cultural anthropological commonalities can be found in this area, including mythology, fauna, flora, folklore, and archaeology. In addition, common linguistic phenomena and the distribution of words of the same etymological origin are present in this territory. Therefore, as a special cultural area, we refer to this area as the “Monsoon Asia Cultural Sphere”(M.A. Cultural Sphere).

The Qinling-Huaihe Line, a prominent north-south cultural boundary in China, is also found within this area. To the east on the same latitude as this Qinling-Huaihe line, the north-south dialect boundary of Korean and the north-dialect boundary of Japanese exist in east-west succession. The north-south dialect boundary of the three regions can be interpreted as forming a single continuous dialect boundary from a linguistic point of view. Factors contributing to the common dialect boundaries in this position can be interpreted as being due to the large differences in climatic temperature and rainfall between the north and south. This north-south boundary, which is continuous in three regions - China, Korea and Japan - is tentatively named the ‘Monsoon Asia Central Climate Line’ (M.A. Central Climate Line).

In the north-south dialects of this borderline, a certain phonological correspondence phenomenon exists that is common to the north-south dialects of Japanese, Chinese, and Korean that are bounded by this borderline, the phonetic correspondence [k/χ-p] (north--south). Other phonological correspondences [b/p-m], [d/t-n], [g/k/χ/h-p/b/f/ Φ /w (← *kʷ)] (north-south) can also be found. An oppositional tendency can be observed in these north-south differences in “phonological correspondence,” with the north-sounding voice being plosive and the south-sounding voice being nasal (or Labial, grave), respectively.

This phonological correspondence can be used to highlight that words for “fire” in Chinese, Japanese, and Austronesian languages, which were previously thought to be separate words, may share the same ancestor (<[*apoi]). The interpretation of this north-south phonological correspondence is therefore important not only for Japanese, Chinese, and Korean, but also for the study of the languages of Monsoon Asia.

Key Words: Phonological correspondence, Monsoon Asia Cultural Sphere, north-south sound correspondence, river-name, The Qinling-Huaihe Line hydronym.

東アジア言語（日本語・中国語・朝鮮語）の南北方言におけるある種の音韻対応 $[k \cdot x - p] < [*kw]$

【図1－①】 モンスーン・アジアの領域とアルタイ諸語の領域（安部 2025）

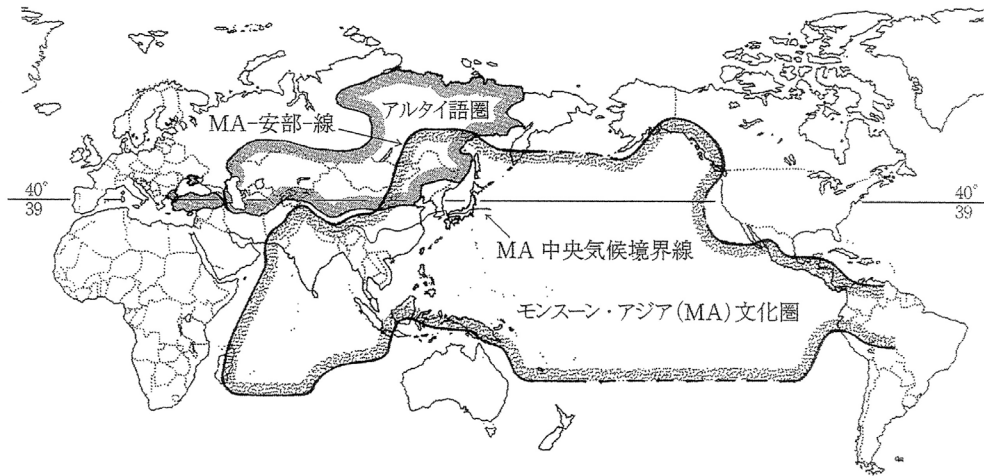
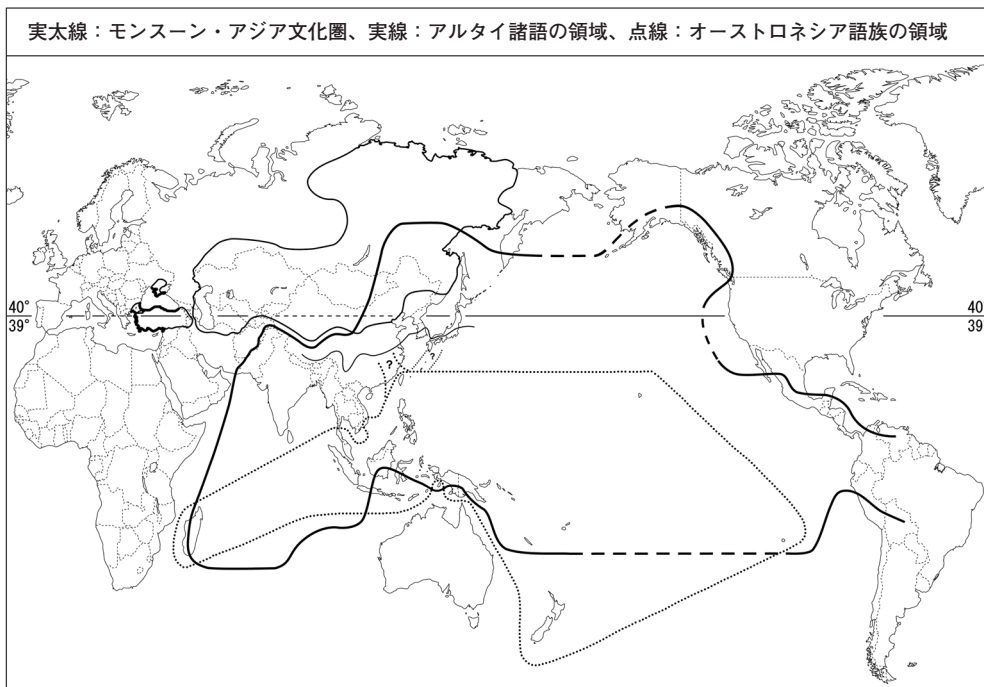
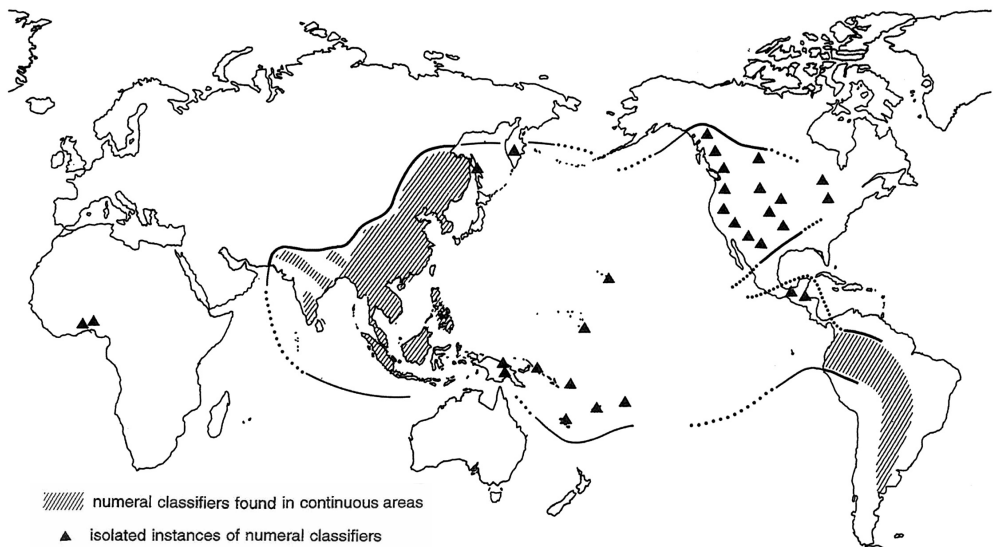


図1 モンスーン・アジア (MA) の領域（安部 2008.3 の図より）
（アルタイ語圏と重複する領域に注意）

【図1－②】 モンスーン・アジアの領域とオーストロネシア語の拡散範囲（安部 2025）



【図2】 類別詞 Classifiers の分布領域 (Aikhenvald (2000) を太平洋を中心に改編して補助線を加筆)



MAP 3. Distribution of numeral classifiers in the languages of the world (based on Alexandra Y. Aikhenvald (2000))

【図3】 アジアにおける言語・文化・気候の複合境界線 (安部(2013.3))

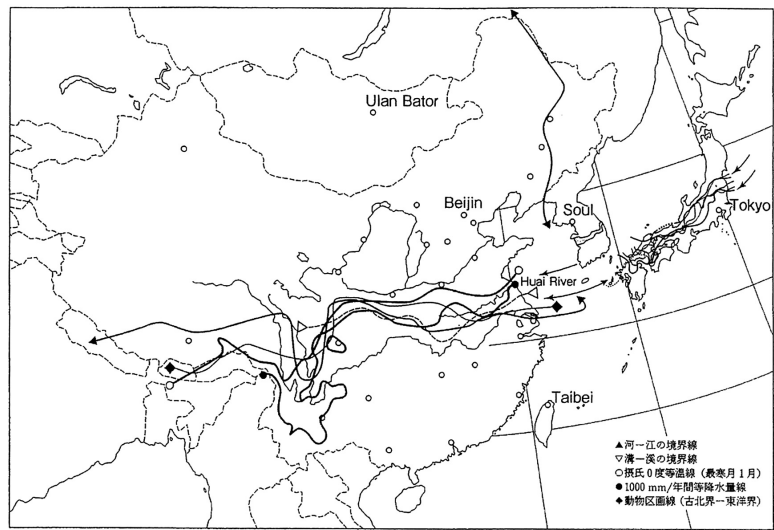
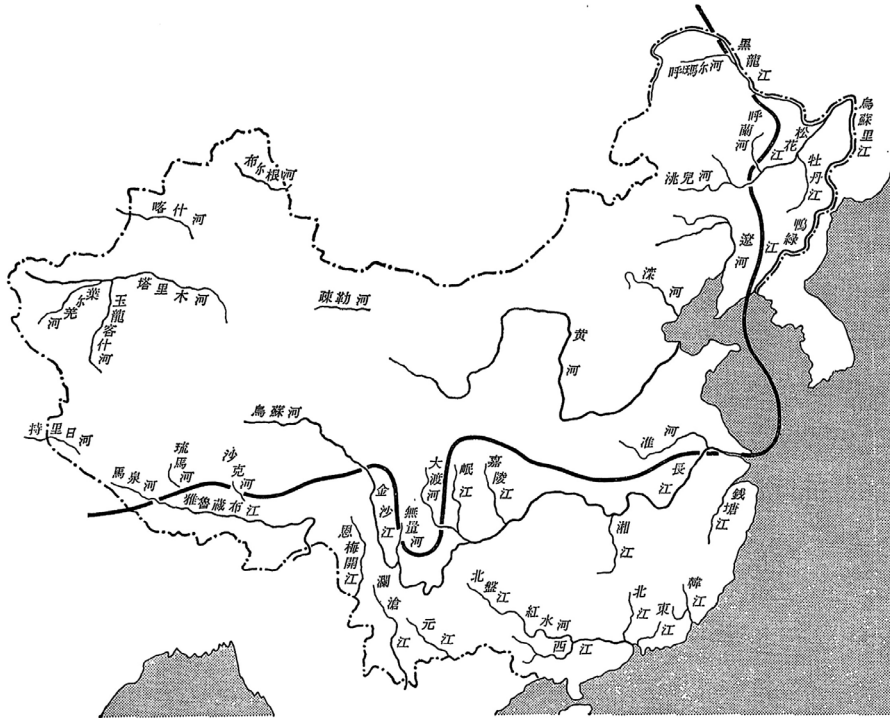


Figure A. Composite borders of languages, culture and climate in Asian region (ABE2013)

図A アジアにおける言語、文化、気候の複合境界線 (安部)

- ▲—▲ North-south dividing line for the use of "he 河" and "jiang 江" in river names of China
- ▽—▽ North-south dividing line for the use of "xi(chi) 溪" and "gou(kou) 溝" in river names of China
- Isothermal line at 0 Degrees Celsius (coldest month: January)
- Isohyetal line at 1000 mm per year
- ◆—◆ Faunal realm (palearctic realm - oriental realm)

【図4-①A】 中国における河川名「江一河」の南北相違（鈴木秀夫（1978）『気候と文明』）



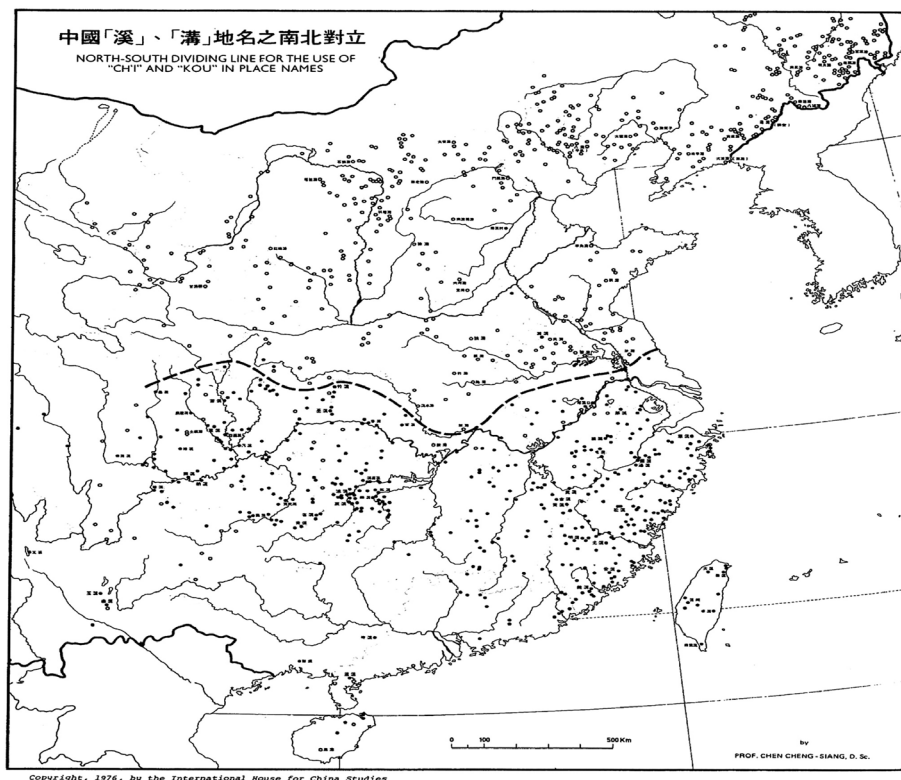
第59図 中国における川の名の分布

【図4-①B】 中国における河川名「江一河」の南北相違（橋本萬太郎（1981）『現代博言学』）



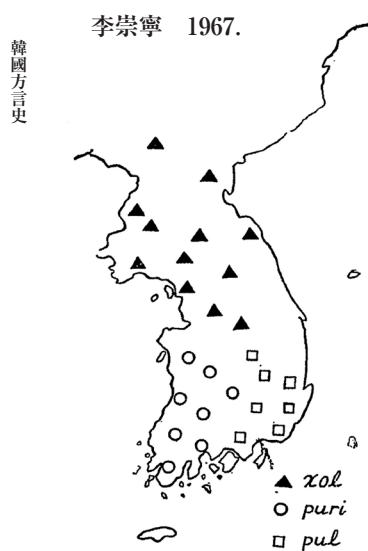
中国大陆の「かわ」

【図4-②】 中国における河川名「溝一溪」の南北相違 陳正祥(1982)『中国歴史・文化地理図冊』

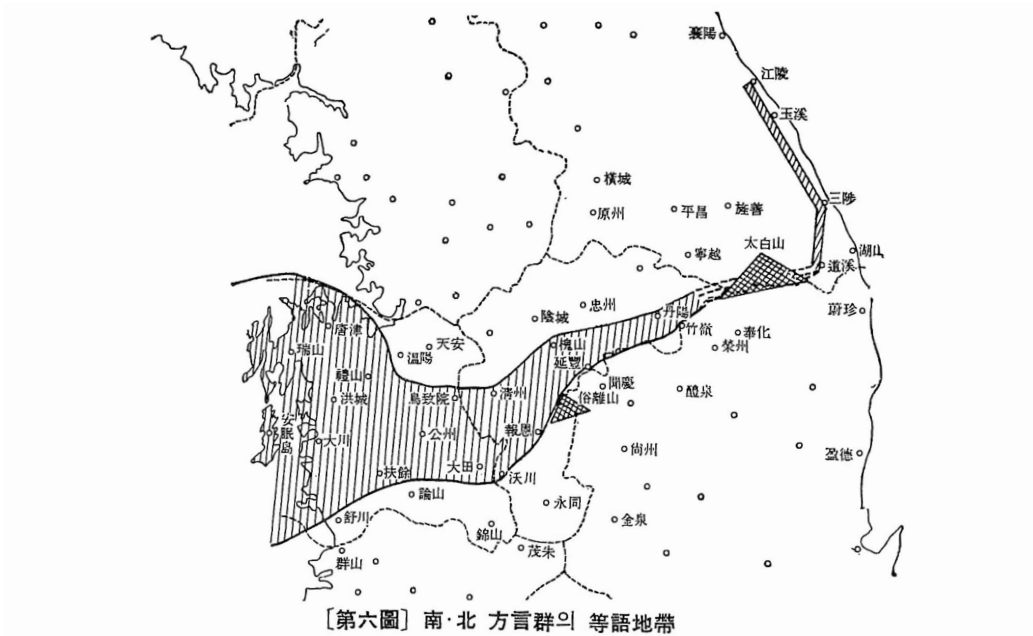


中國「溪」、「溝」地名的南北對立

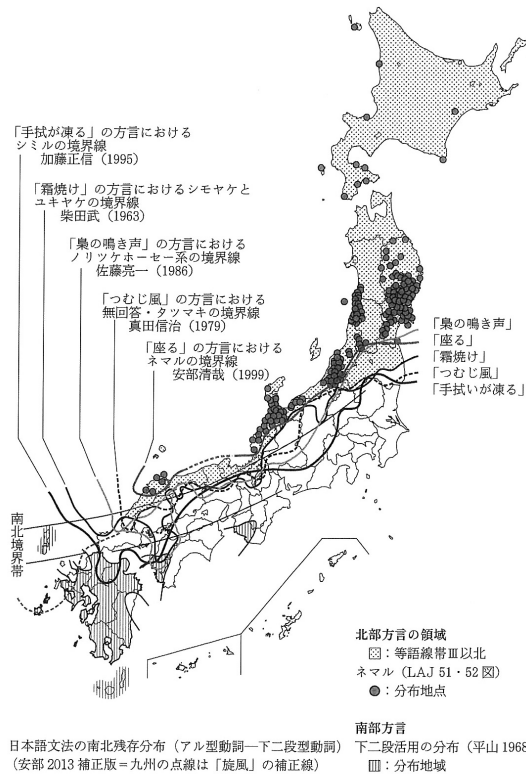
【図5-①】 朝鮮語 「城・忽(村落)=夫里 pul」における南北の [x・k-p] 対応 (北部方言の音価には [kor], [hor] 諸説あり) (李崇寧 (1967)『韓国方言史』)



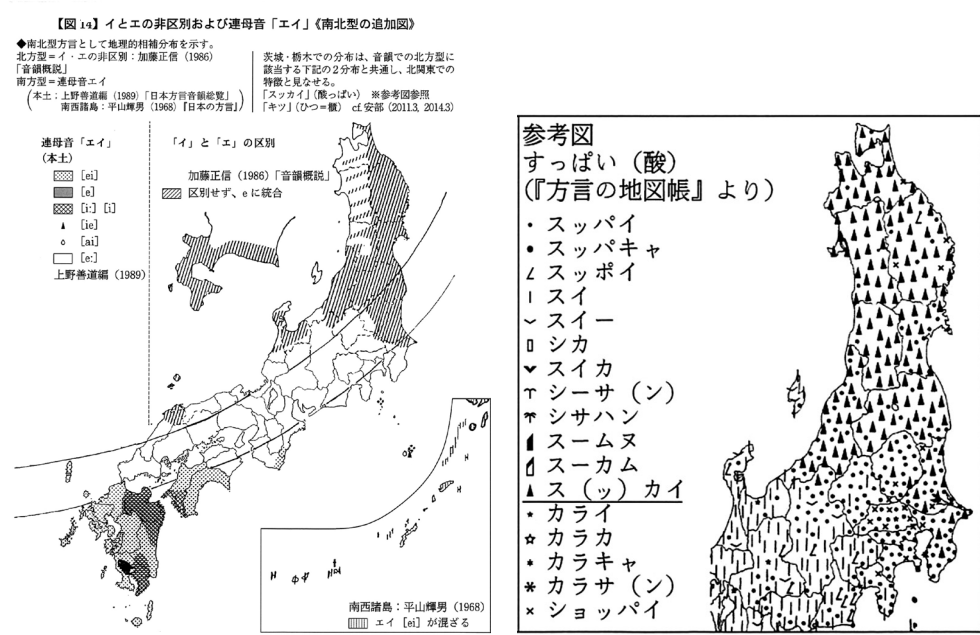
【図5-②】 朝鮮語における南北方言境界線（李崇寧（1967）『韓国方言史』）



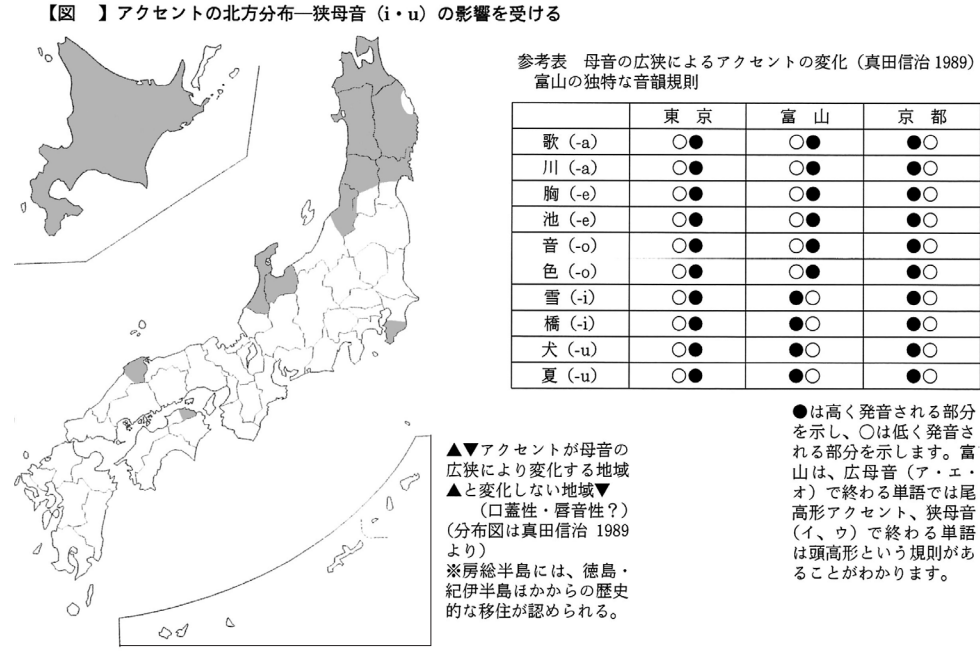
【図6-①】 日本語方言における南北型方言分布（安部（1999）以降。安部（2025））



【図 6-②】 日本語方言における南北での相違：「スッパイとスッカイの南北境界」（右枠）および、「イ」「エ」と「エイ」における南北の相異（前舌狭母音のイが北部で影響を受け、《中舌寄り少し広い》エに接近する）（安部（2023））



【図 6-③】 アクセントの南北相違：アクセントの北方分布（狭母音（i・u）の影響を受ける）（《前舌・狭》母音のイが、《後ろ・狭》のウと共に北部で影響を受ける。より《広・中》のア・オ・エのようにはアクセントを支えられない？（安部（2023））



東アジア言語（日本語・中国語・朝鮮語）の南北方言におけるある種の音韻対応 $[k \cdot x - p] < [*kw]$

【図7】 東アジアの旧石器（細石刃文化）の2タイプの南北拡散ルートと南北境界線（吉崎昌一（1986））

図 モンスーン・アジア文化圏の中の東北アジアの位置（補助線安部追記）

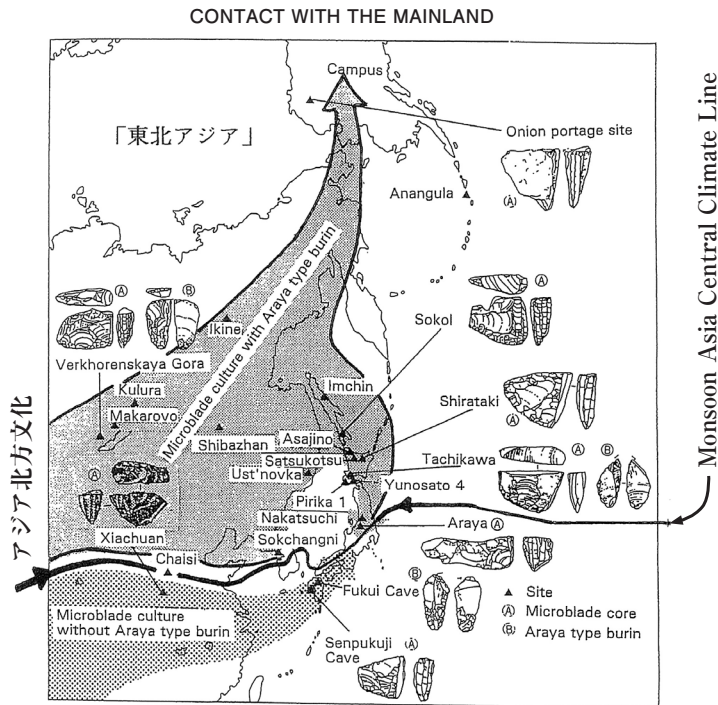


Figure 3.16 Diffusion of wedge-shape microblade core from the mainland into the Japanese islands (Yoshizaki 1986)

【図8】 中国語における南北の「k-p・f・m」：否定語の南北方言での相違（鈴木秀夫(1978)）、：図は橋本萬太郎による資料を地図化したもので、北部に [aku] [aqu] も見られる点に注意。）

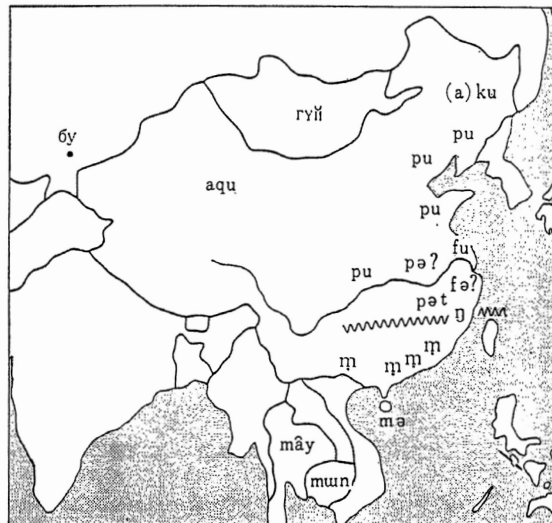
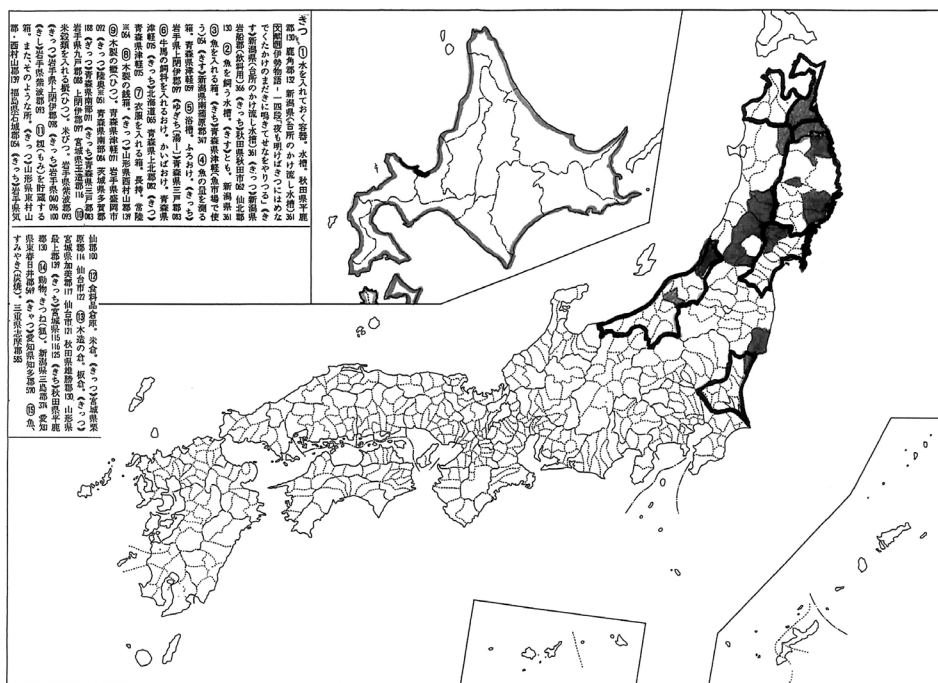


図 否定語の分布（橋本による資料を図化）



CHN (榼)
*giuəd³

KRN mdl
*kusi

JPN north : kitu, kisi, kitchi

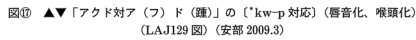
JPN south : pitu, putu
(榼)

AINU karafuto : kinchi

AINU kitchi

Map E *git, *kit~*bit, *pit (k-p alternation) as for “pail, bucket, fub made of wood” (櫃) in Monsoon Asia

【図9-②】 日本語方言における南北 [k - p] 対応:「北アクドー*アフド (>アウド>南アド)」(踵)
(安部 (2013)、図は佐藤亮一(=))、LAJ「踵の言語地図」参照

[illegible]

39

【図 11】 北モンゴロイドと南モンゴロイドの南北分布境界線（オッペンハイマー（2007 < 2003））

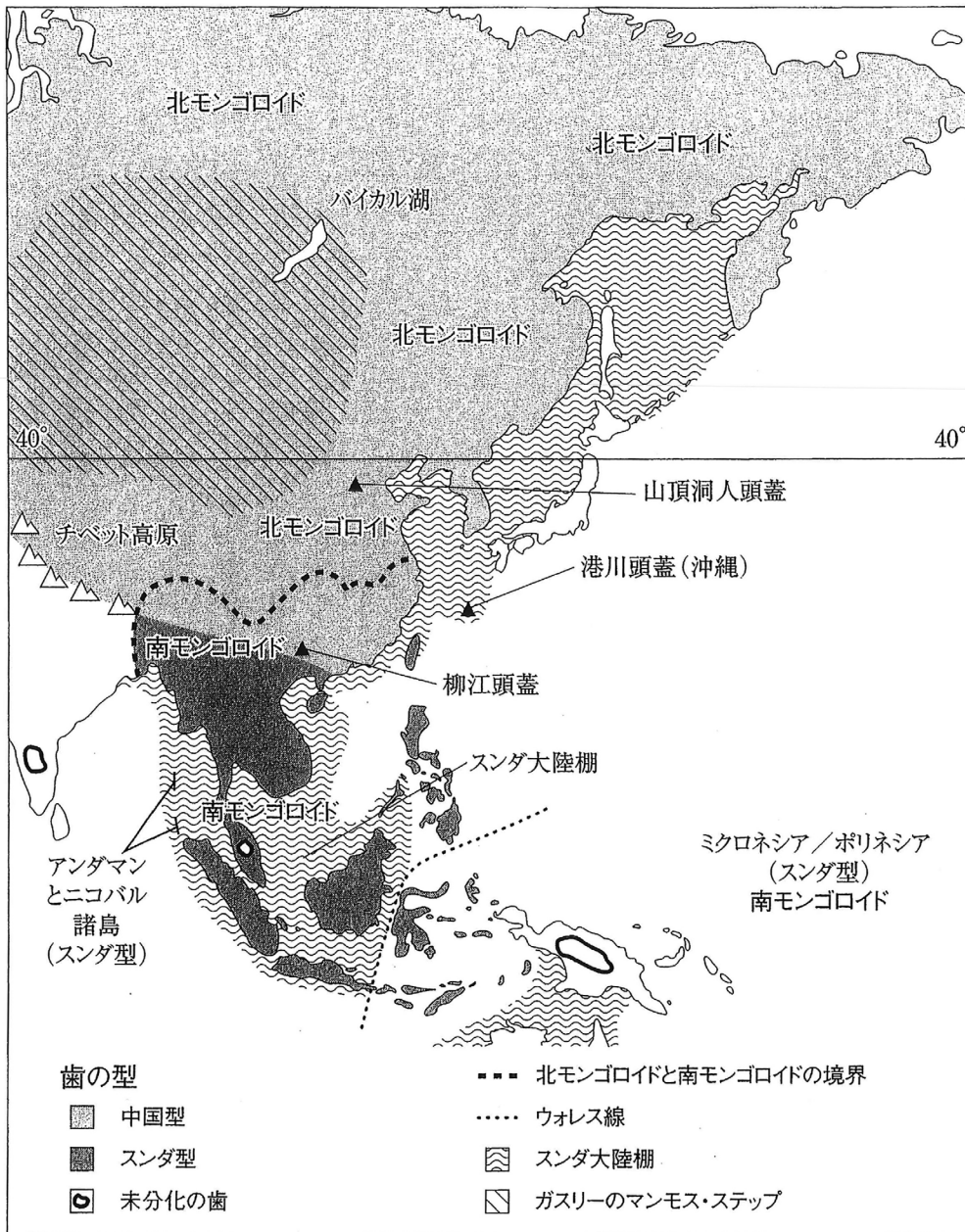


図5・2 東アジアのモンゴロイド型と歯の分化の地図。スンダ型と中国型の歯形は、南モンゴロイドと北モンゴロイドにそれぞれおおよそ重なるが、例外は南中国、揚子江が北と南のモンゴロイドを分けている。サハリンと日本が入っていないのは、先住民のアイヌ人と、その縄文人の祖先が、部分的にスンダ型を示しているため。
(Stephen, Oppenheimer, Out of Eden: the peopling of the world, 2003, 『人類の足跡の10万年全史』 2007, 草思社)

【図 13】 アジアにおけるエステラーゼ同位酵素 A 型・E 型系統の北・南の分布（吉武成美（1986）『日本人のための生物資源のルーツを探る』筑波書房（南北の境界線を補入））

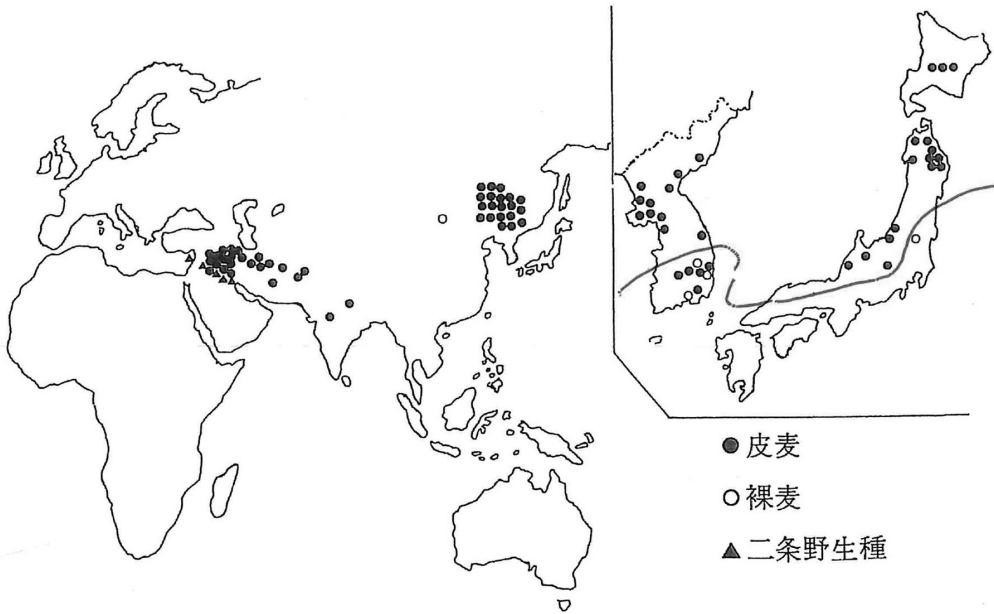


図 アジアにおけるエステラーゼ同位酵素 A 型 (*Ca-Fr-Su*) 系統の分布

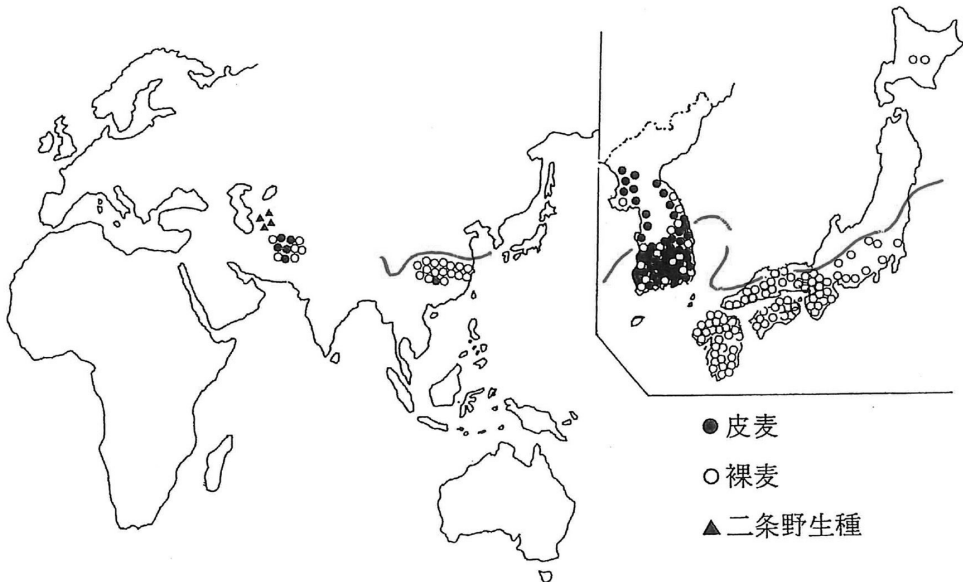
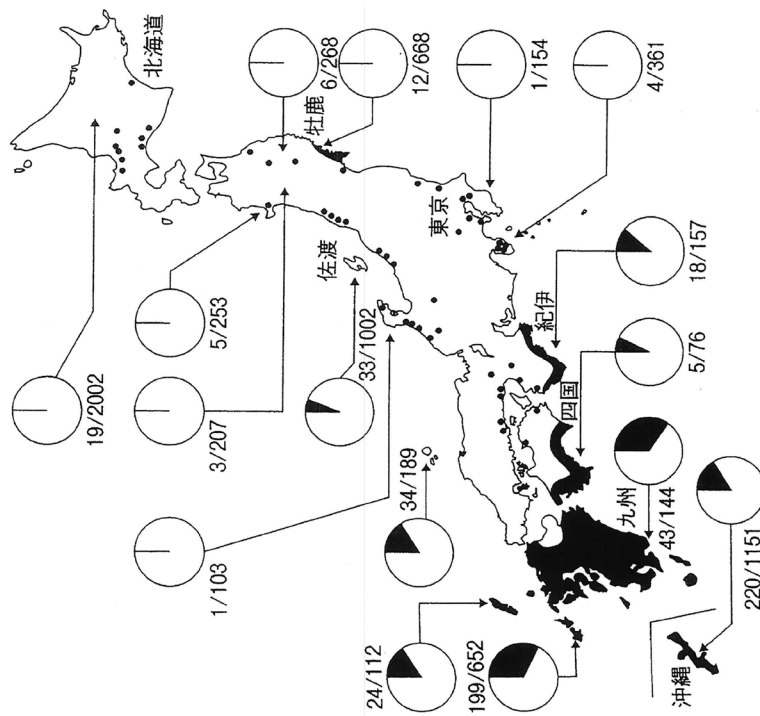


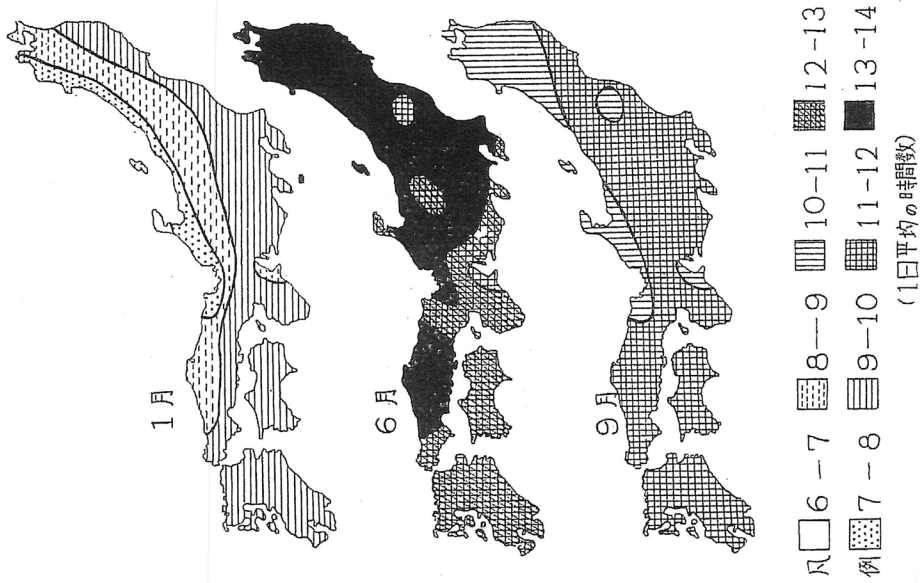
図 アジアにおけるエステラーゼ同位酵素 E 型 (*Af-null-Su*) 系統の分布

【図 14】 日本の HTLV-I キャリアと ATL 患者の分布 (木下研一 (2003) より。原図は田島和雄 1986) 「図説 臨床「癌」シリーズ」 9)



地図の上の点は ALT 患者を示し、塗りつぶされたところは患者多発地帯を示す。円グラフは地域のキャリア率を示す (田島, 図説臨床「癌」シリーズ, 9, 66, 1986)

【図 15】 屋外労働に適する時間 (日下部正雄 (1954) 「屋外労働に適する時間」 「天気」 1-5)



【図16】 東方アジアにおける樹上葬・台上葬の分布（江守五夫（1993）、列島部に安部（2023）での南北方言境界帯の補助線を加筆）
（江守五夫（1993）「日本の家族慣習の源流としての中国北方民族文化」）

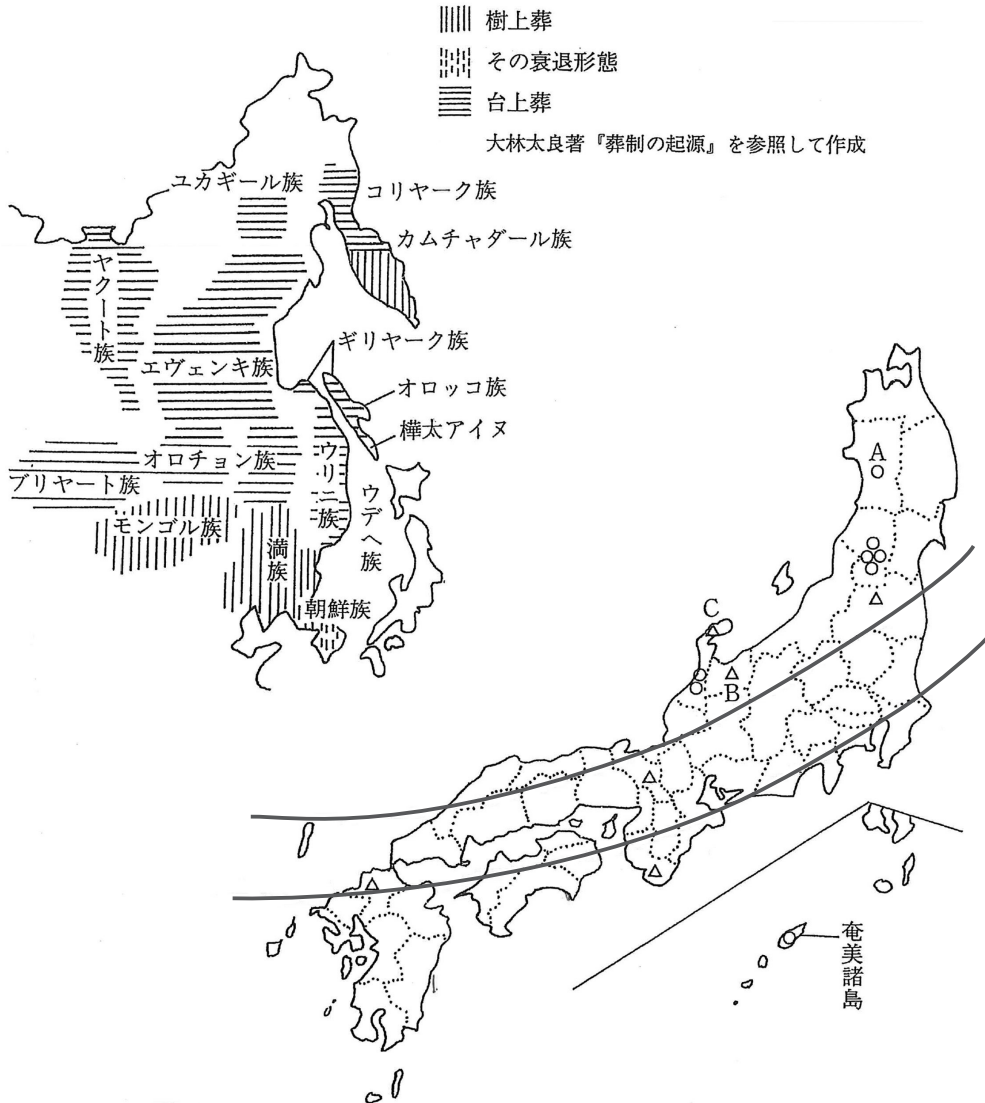


図 骨掛けの葬制(○印)と“骨掛けの木”の伝説(△印)

本分布図の素材は、○Aが森 謙二氏より、△Bが藤田富士夫氏よりそれぞれ聴取し、△Cが西山郷史氏の論文によるほかは、すべて大林太良著『葬制の起源』に依拠している。

【図 17】 ブナ林の分布：日本海型・太平洋型の植生学的な境界（福岡ほか 5 名 (1995)「日本のブナ林
群落の植物社会学的新体系」『日本生態学会誌』 45)

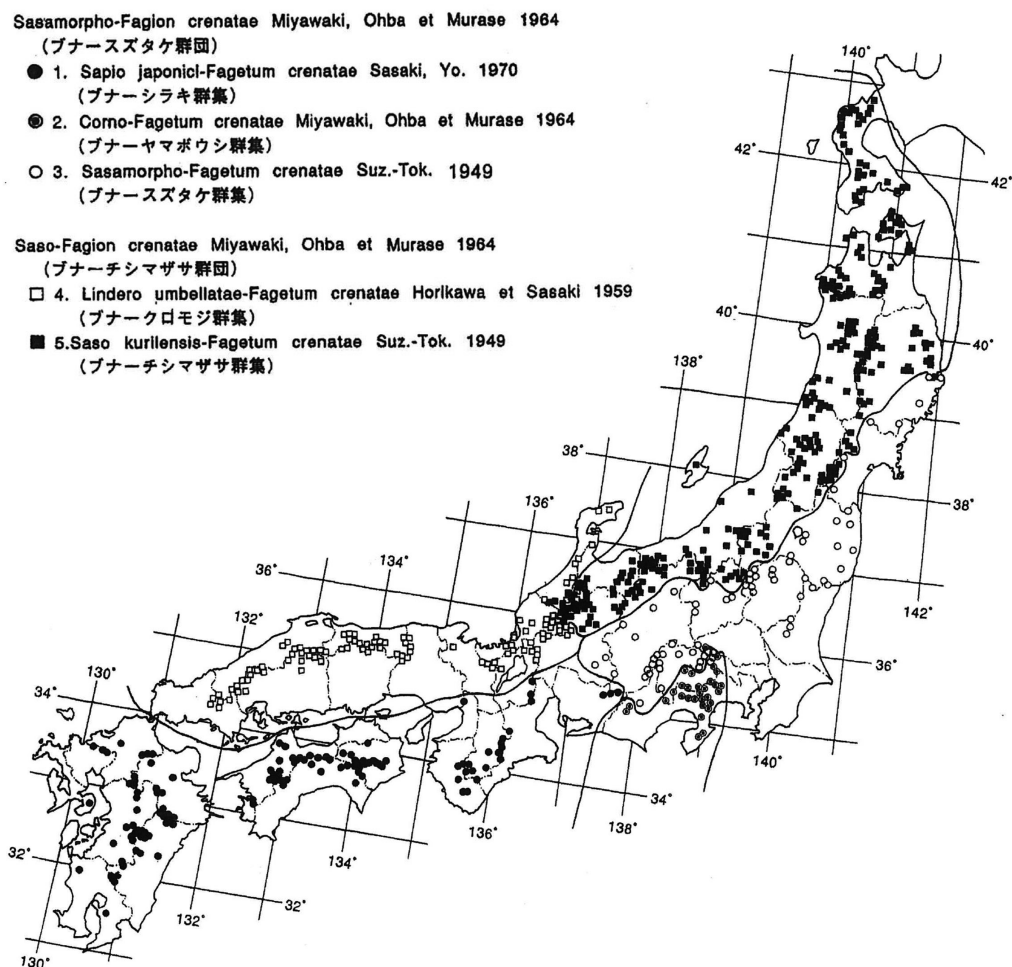


Fig. 1. Distribution map of the five associations identified in Japan. Each symbol represents a different association, based on reports of various studies.